

12
二葉 小国 420

国語の本

文部省検定済教科書
新教育実践研究所編

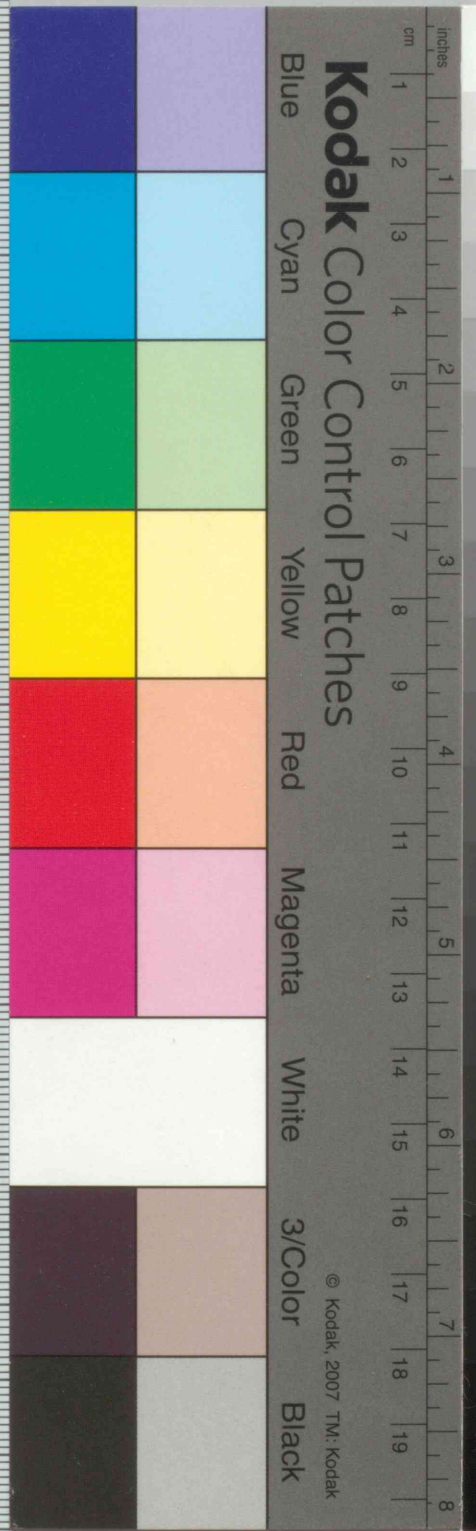


T1A7
1L0
2

四年上

7

教
3
01



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60341

教科書文庫

6
8/0
29-950
01304 49918





広島大学図書

0130449918



第四学年 上

国語の本 七



教科書文庫
6
810
34-1950
0130449918

昭和二十五年八月十二日
文部省検定済小学校国語科用

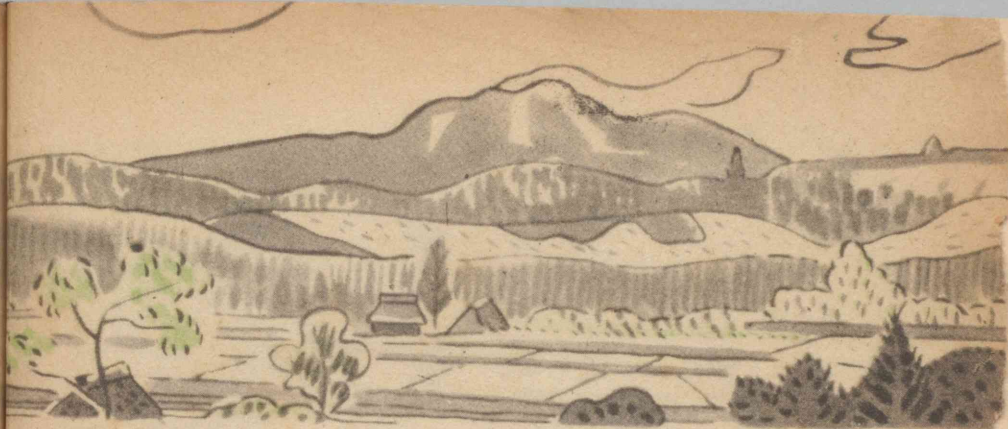
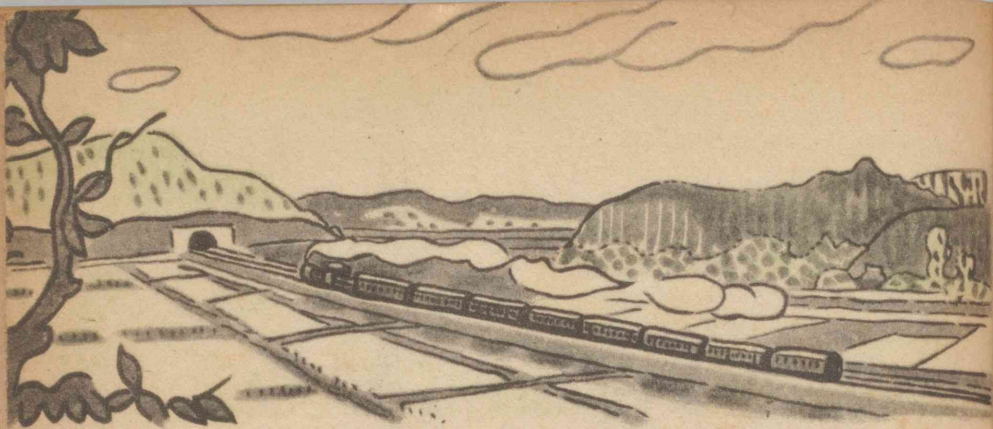


中央図書館

広島大学図書

0130449918





もくろく

一 まっすぐな道 (4)

二 学級新聞

(一) 話しあい (6)

(二) 編集集 (12)

(三) 第一号から (17)

三 私のすきな話

(一) ぬれた本 (30)

(二) ナイチンゲール (34)

(三) いのししの絵 (38)

四 楽しい見学

(一) 学校林 (42)

(二) 放送局の見学 (58)

五 ジョンの馬車 (69)

六 水と子ども

(一) 海の子ども (86)

(二) 水泳日記から (88)

七 夏休みの生活発表

(一) まゆの研究 (94)

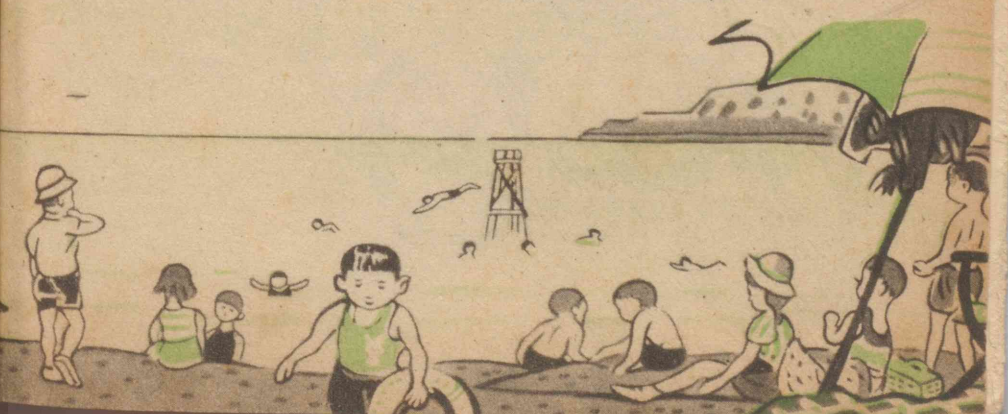
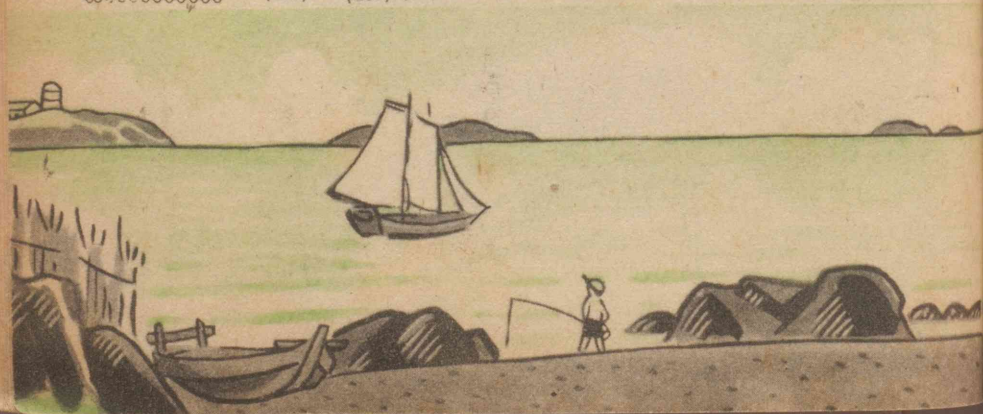
(二) 東京から大さかまで (103)

八 ロビンソン・クルーソー (118)

学習の手引 (153)

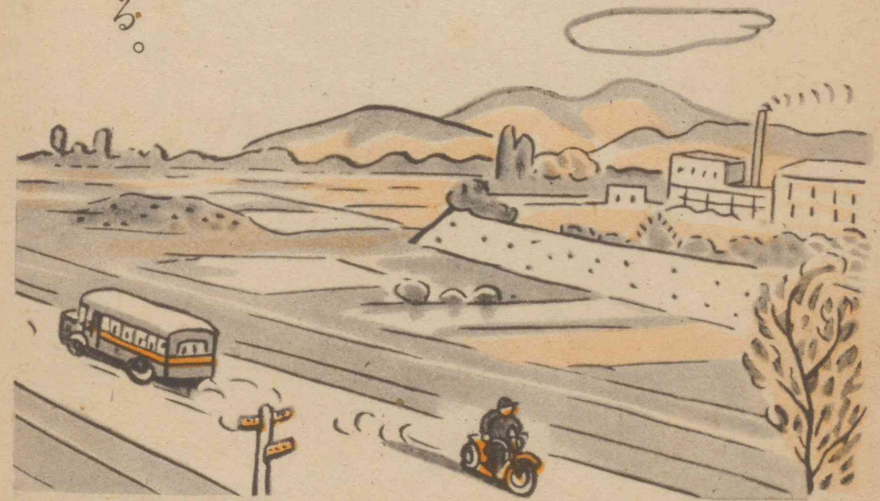
新しく出たおもしろなことば (145)

新しく出たかん字 (159)

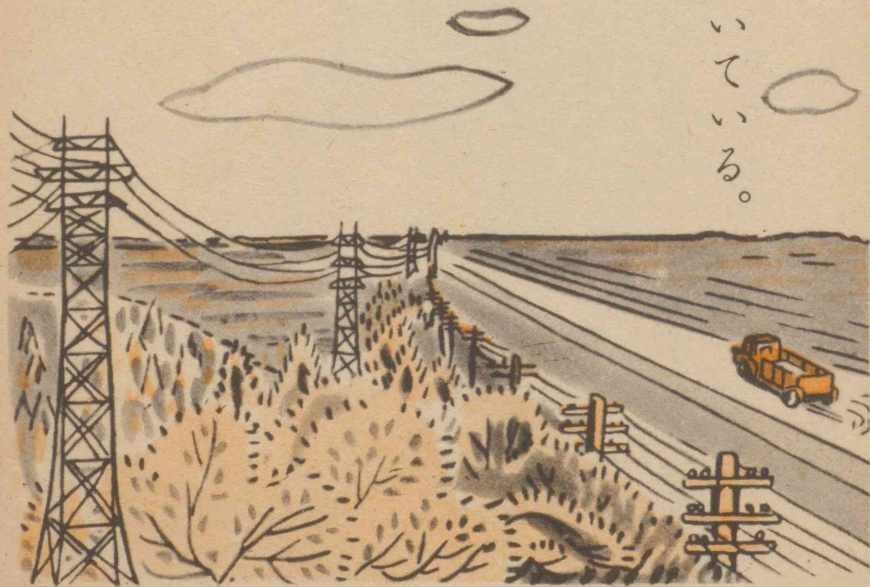


— まっすぐな道

はば広いほそうした道。
おか、林、野の中をつつきって、
どこまでもまっすぐな道。
ぼくはこの道を行くのだ。
トラックがはしって行く。
銀バスが追っかける。
オートバイがぼく音とほこりを立てる。
この道をぼくは行くのだ。

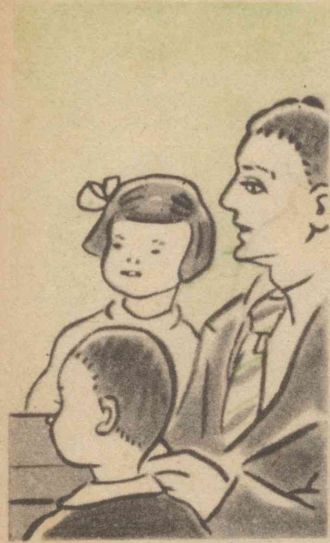


白い雲と地平線。
電柱と鉄とうが先へ先へとつづいてる。
あかるい、かがやかしい道。
たいようの下の一本道。
この道をぼくは行くのだ。
空を見ろ。ひるむな。
どこまでも気ばってあるけ。
ぼくは自分でめいれいする。
この道をぼくは行くのだ。



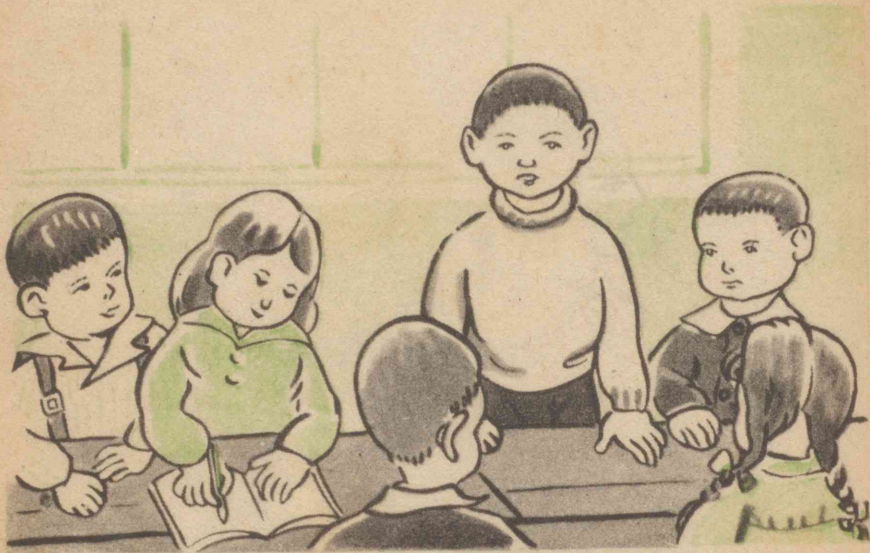
二 学級新聞

(一) 話しあい



あきらさんたちの学級そうだん会は、みんなのためになることを、みんなでいろいろ話しあってきめる楽しい会です。きまったことは、すぐ実行していきます。

きょうは、学級新聞のことに
ついて話しあいをするのです。
先生がおいでになったので、



いよいよ会がはじまりました。
話しあいを進めていくのはあき
らさん、きまったことを書くの
はちよ子さんになりました。

あきら「きょうは、このまえの会
で問題になった、学級新
聞のことについて話しあ
いをしましょう。ぼくた
ちの学級新聞がよくなれ
ば、この組がますますよ
くなります。よい新聞を

作るにはどうしたらいいか、みなさんの考えをいって
ください。」

たかし「三年生の時のせていたニュースや、作文や、詩や、組
のけいかくなどのほかに、もっといろいろな記事のを
せたいと思います。たとえば、ほかの先生がたや、町
の人のお話をのせたり、読んだ本のおもしろかったと
ころのをせたりしたらどうでしょう。」

よし子「私もそう思います。そのほかに、私たちのけんきゆう
や、かかりできめたことなどもせましよう。」

しげる「おもしろくないと、みんなが読まないから、わらい話
や、まん画などもぜひのせてください。」

はるえ「いろいろな記事のをせることにはさんせいですが、私
は、みんなの目につきやすいように、記事のみだしや

絵の入れかたをもっとくふうしたいと
思います。」

みんな「さんせい。さんせい。」

あきら「記事や、そのせかたについて、いい
意見が出ました。ほかに、なにかあり
ませんか。」

つよし「今までののは、かべ新聞だったけれど、
もう四年生なんだから、いんさつした新聞にしたいな
あ。」



よしお「いんさつするのはいいが、ひ
用がたくさんかかるよ。」

つよし「どうしやばんでいんさつすれ
ばいいよ。」

先生「いんさつに気のついたことは
たいへんいいことです。新聞
はいんさつするにこしたこと
はありません。しかし、みな
さんにはまだ少しむりでしょう。」

あきら「それでは、編集のかかりになる人をこれからきめまし
ょう。なんんぐらいにしたらいいでしょう。」

きよし「ぼくは、今までやってみて、八人ぐらいがいいと思ひ
ます。人が少ないといそがしくて間にあわないし、多
すぎると話がまとまりません。」

つる子「私も、そのくらいでいいと思います。」

あきら「では、編集がかりになる人を八人えらぶことにしまし
ょう。どんな人がいいでしょう。」

たかし「記事のえらびかたや、のせかたのじょうずな人がいい
と思います。」

はるえ「字のきれいな人や、絵のじょうずな人もいます。」

きよし「今までかかりにならなかつた人にも、はいつてもらひ
ましよう。」

工場のまどに、

電燈がぱつとついた。

女工さんたちのそばで白い糸が、
川のように光った。



新しい本がきました

〔月の世界〕

空にぼっかりうかんでいる月。あ
うさぎがいるでしょうか。いったい
なっているのでしょうか。この本は

あきら「どんな人がいいかわかりました。では、これから八人のかかりをえらびましょう。」

(二) 編集



つぎの日、新聞のかかりになったしげるさんたちは、編集のことについてそうだんしました。みよ子さんは、そうだんできまったことを、つぎのように書きとめました。

一 どんな新聞を作るか。

(1) 一月に二回、第一と第三の月曜日に発行する。

(2) ためになる新聞、おもしろくて読みやすい新聞。

(3) いろいろな記事を入れて、おもしろくする。のせかたをよくくふうする。

(4) 字をきれいに書く。記事のみだしをくふうする。さし絵やカットのほかに、しやしんや絵も切りぬいてはる。

(5) 新聞の名まえは、みんなにどうひょうしてもらってきめる。

(6) 時々、先生やみんなに、ひひょうしてもらって、よい新聞にしてい。

二 作りかた。

(1) 記事はみんなに書いてもらう。時々、題をきめてみんなからげんこうを集める。

○ みんなの書くもの。
ニュース（学級のこと、学校のこと、世の中のこと）
作文、詩、かんさつ日記、けんきゅう、わらい話、まん画など。

○ 学級のかかりの人が書くもの。
みんなに知らせること。気をつけてもらうこと。

○ 編集がかりの書くもの。
ニュース、さし絵や

カット、先生や町の人たちのことばなど。

(2) 仕事のじゆんじよ。

○ だいたいの組み立てをきめる。

○ げんこうを集めてせりする。



○ どの記事を大きく出すか、なにをどこにのせるか、
どんな絵を入れるかなどをきめる。

○ 編集ができたなら紙に書いていく。切りぬきもはりつ

○ どの記事を大きく出すかなにをど
ける。

○ 編集ができた紙に書いていく。
全体をよく見てなおす。

○ 全体をよく見てなおす。文字の
に気をつける。

それからうけもちおきめて仕事を
はじめた。月曜日の朝「なかよし新
別行

それからうけもちをきめて、
仕事をはじめました。

月曜日の朝、「なかよし新聞第一号」が、教室のかべにはり出
されました。

げんこうもたくさん集まり、かかりのものもいっしょうけ
んめい編集したので、りっぱな新聞ができました。

(三) 第一号から



校長先生のことば

- まっすぐに立ち、まっすぐにこしかける子ども。
- だれを見てもにこにこして、けっして口をどがらせない
子ども。

○ よい本をおわりまで読み、始めた仕事を終りまでやりと
おす子ども。

こんな子どもは、みんなにすかれる。

これはだれでしょう



——たろうさんのおかあさんから聞いた話——

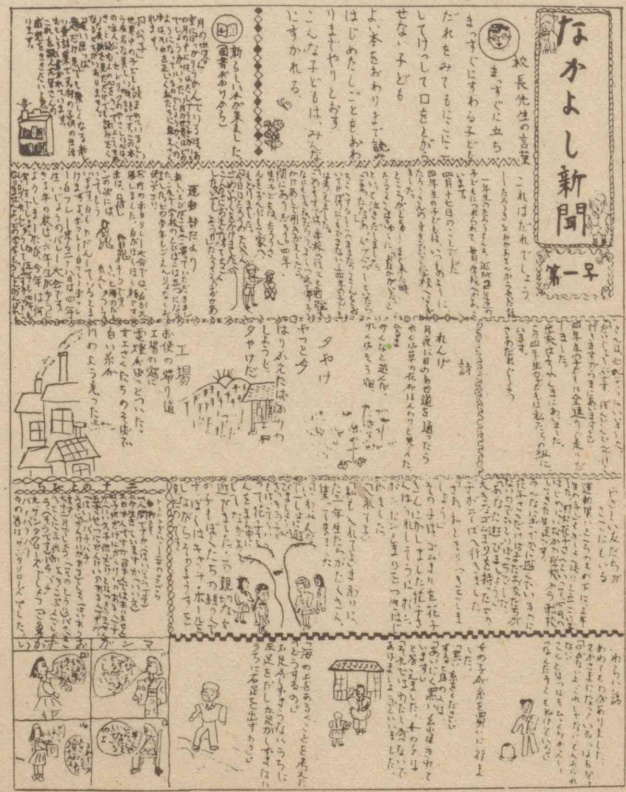
一年生のたろうさんは、近所の四年生の子どもにつれられ
て、毎日学校へ通っています。

四月十七日のことでした。四年生の子どもは、いつものよ
うに、たろうさんの手を引いて学校へいそぎました。ところ

が、とちゅうまでき

た時、たろうさんは、
きゆうにおなかがい
たいといってなきだ
しました。

「こまったなあ。ぐ
ずぐずしていたら
ちこくするし、こ
のままたろうさん
をおいてけぼりにもできないし——」。
四年生の子どもは考えました。





「このようすでは、学校までつれて行っても、とても勉強もなにもできないだろ。よし、おんぶしてつれて帰ろう。かけ足で引きかえしたら間にあうだろう。」
その子は、たろうさんをおんぶして、家までつれて帰りました。
「まあ、ほんとうにすみませんでした。こんなにおそくなって、学校におくれはしませんか。」
たろうさんのおかあさんは、心

配そうにこういいました。

「だいじょうぶです。ぼく、どんどんかけて行きますから間にあいますよ。」

四年生の子どもはこういって、どんどん走りだしました。

学校についた時、始業のベルがなりました。

この四年生の子どもは、私たちの組の中にいます。さあだれでしょう。



やさしい友だちがここにもいる

運動場のさくらの木の下に、三年生の子どもがしょんぼりと立っていました。

川村花子さんといって、四月のはじめに、いなかの学校から転校してきた人です。みんなにぎやかに遊んでいるのに、花子さんだけはまだお友だちがないのでひとりぼっちでした。

「あなた、遊びましょう。」

大きなゴムまりを持った女の子が、わらいながらそばへ行きました。

「さあ、わたしとまりつきをしましょう。」

その子は、ゴムまりを花子さんにかしました。



花子さんはうれしそうに
ぽん、ぽん、ぽんと、まり
つきをはじめました。

「入れてよ。」

「わたしも入れてよ。」

まわりにいた三年生が、
たくさん集まってきました。

「ええ、みんなで一しよに
遊びましょう。」

さっきの子どもはそうい
って、花子さんをまん中にして、
なかよく遊びました。

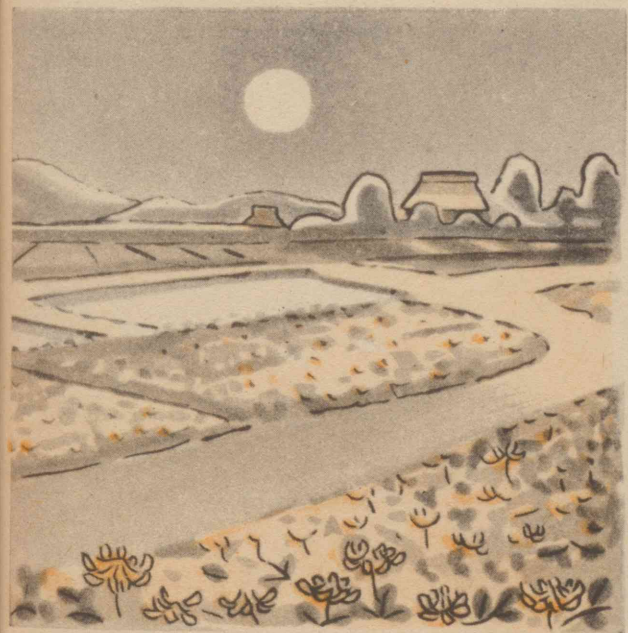
このしんせつな女の子も、ぼくたちの組の人です。
 ぼくはキャッチボールをしながら、そのようすを見たので
 す。



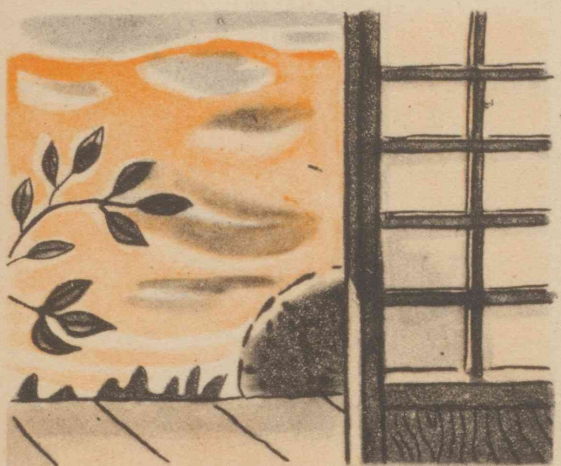
詩

れんげ

月夜に
 田のあぜ道を通ったら、
 れんげそうの花が、
 ほんのりと見えた。

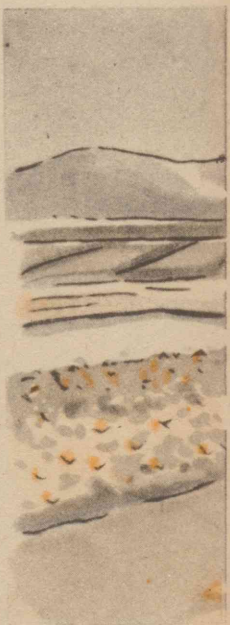


昼ま、
 みんなと遊んだ
 れんげそうの畑。



夕やけ

やっと今、
 はりかえたばかりのしよじ。
 夕やけだ。



工場

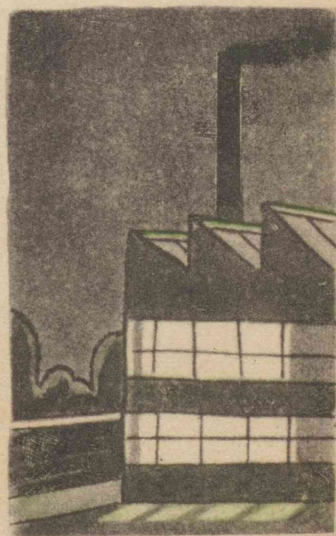
お使いの帰り道、

工場のまどに、
電燈がぱつとついた。
女工さんたちのそばで白い糸が、
川のように光った。



新しい本がきました。

図書がかりから



〔月の世界〕
空にぽっかりうかんでいる月。あの月の中には、はたして
うさぎがいるでしょうか。いったい、月の世界はどのようになっ
ているのでしょうか。この本は、それを正しく私たちに
教えてくれます。

〔小公子〕
世界中の子どもに読まれている名高い美しい物がたりです。
この本の主人公セドリックのやさしい心は、きっと読む人の
心を美しくするでしょう。きれいな表紙を見ただけでも、読
みたくなるにちがいありません。

〔あたたかい原っぱ〕

題だけ見ても楽しくなる新しい童話集です。村の子どもの
生活が、おもしろく書かれています。これを読んだみなさんの

感そりを聞きたいと思えます。



わらい話

あわてものがありました。

さかさまになっているつぼを見て、

「口がないよ。これでは何も入れられない。」

今度は、つぼをひっくりかえして、

「なあんだ。そこがぬけている。」

女の子が糸を買いに行きました。

「黒い糸をください。」

すると店の人は、

「あいにく、黒い糸はきれています。」

と答えました。女の子は、

「それでは、わたしがつないであげましょう。」

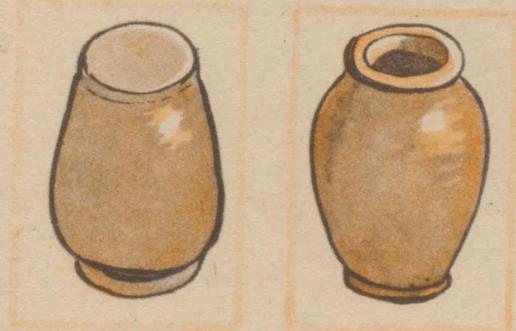
といました。



「海の上をあるくことを考えた。」

「どうするの。」

「左足がしずまないうちに右足を出し、右足がしずまないうちに左足を出すのさ。」





三 私のおすすめな話

(一) ぬれた本

いなかのまずしい家に生まれたり
ンカーンは、家に本もなく、近くに
図書館もなかったのて、十オごろまで本を読むことなどはで
きませんでした。時々、通りがかりのたび人から、めずらし
い話を聞いては心をなぐさめるくらいでした。

けれどもリンカーンは、本が読みたくてたまりません。本
を持ってゐる人があると、どんなに遠くてもたずねて行き、

その本をかりてきて、くりかえしくりかえし読みました。

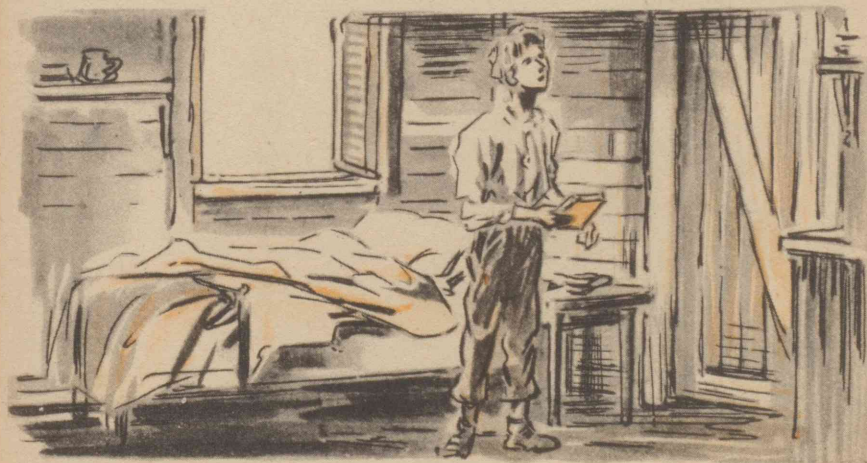
ある時、近所の人からワシントン伝という本をかりました。
ワシントンは、アメリカで、はじめての大どうりようになっ
た人です。リンカーンはまえから、ワシントンが大すきだっ
たので、熱心に読みつづけました。

昼の仕事のあいまに読むの
はもちろん、夜はどこについ
てからも読みました。そして、
ねる時は、あくる朝すぐ手に
とれるように、まくらもどの
かべのそばにおきました。



あるばんのこと、夜中にはげしい
あらしがありました。リンカーンが
目をさました時はもう間にあいませ
んでした。かべのすき間からもった
雨のために、本がすっかりぬれてい
ました。リンカーンは、子ども心に
もたいへん心配して、そのばんはど
うどうねむれませんでした。

あくる朝、さっそく本をかして
くれた人の所に行つて、そのわけを話
し、



「ほんとうにすみません。
本を買つてお返しするこ
ともできませんから、な
にか私に仕事をさせてく
ださい。」

とたのみました。

その人は、べつにとがめ
もしないで、リンカーンの
ことばどおり、三日の間、畑の手つだいをさせました。そし
て、本はそのままリンカーンにくれました。

リンカーンは、その本をていねいにかわがして、なんべん

も読みかえました。

リンカーンは後にえらばれて、アメリカ第十六代の、りっぱな大統領になりました。

(二) ナイチンゲール



赤十字社のはじまるもとになったイギリスのナイチンゲールは、小さいころからたいそうやさしい心の主でした。

ある時、年とったぼうさんといっしよに近くの道をおいてみると、とつぜんくるしそうな犬

のなき声が聞こえてきました。見るとそれは、いつもひつじの番をしている犬でした。

ナイチンゲールは、そばにいたひつじかいのおじさんに、

「おじさん、その犬どうかしたのとききました。」

「子どもに石をなげつけられて、足に大けがをしたのです。」

ひつじかいのおじさんは、心配そうにいました。

ぼうさんは、きずをしらべ



てみて、

「これなら、そのうちになおるでしょう。」

と、いって、たちさろうとしました。

けれども、ナイチンゲールは、くるしそうな犬のなき声を聞くと、かわいそうでたまりません。ぼうさんに手あてのしかたをききました。ぼうさんは、

「あたたかい湯で、しっぷしてやるといいでしょう。」
と、いいました。

ナイチンゲールはすぐ湯をわかして、しっぷの用意をしました。そして、ていねいにきずの所にあててやりました。犬は、うれしそうにじっとしていました。



あくる日も そのつぎの日も、ナイチンゲールはしんせつに手あてをしてやりました。つぎの日に行ってみると、犬はもう元気よくひつじの番をしていました。ナイチンゲールのすがたを見ると、しっぽをふりながらとんできて、ナイチンゲールにくびをすりつけました。

ひつじかいのおじさんは、にこにこしながら、
「どうもありがとう。おかげでこんなに元気になりましたよ。」
と、お礼をいいました。



(三) いのししの絵

むかし、京都に、まる山おうきよ
という名高い絵かきがありました。
ある時、人から、ねているいのし
しの絵をたのまれました。そこで、
おうきよは、どうかして、ねているいのししをじっさいに見
たいと思いました。山おくの方からたきぎを売りにきた女に
そのことを話すと、
「いのししなら、私の村で時々見かけますよ。」
といいました。おうきよは喜んで、

「今度、いのししを見かけたら、すぐ知らせてもらいたい。」
と、たのみました。

一月ほどたったころ、まえの女がやってきて、
「今、私の家の竹やぶに、いのししがきてねています。」
と知らせてくれました。

おうきよは、大喜びでかけつけました。
見ると、竹やぶの中に、一ぴきの
大きないのししがねています。お
うきよは、じっとそのいのししを
見つめて、手早く写生しました。

家に帰ってから、いろいろくふ



うして、ねているいのししの絵をりっぱにかきあげました。

おうきよはその絵を、山おくから来た炭売りのおじいさんに見せました。するとおじいさんは、

「これは、病気でねているいのししでしょう。じょうぶないのししは、ねむっていても、せ中の毛をさか立て、足をぴんとはって、なかなかいきおいのあるものですよ。」

といいました。



四五日たってから、まえの女がきて、

「あのいのししは、間もなくあそこで死んでいました。」と知らせました。

おうきよは、「なるほどそうだったのか。」と思いました。

そこで今度は、じょうぶないのししのねているところをさがし出して、写生しました。そして、また心をこめてかきあげました。

炭売りのおじいさんがきた時、その絵を見せると、おじいさんは、

「これです。これです。このとおりです。」
と、心から感心しました。

四 楽しい見学

(一) 学校林

あきらさんたちは、先生につれられて、高水山の学校林を見学に行きました。

あせを流しながら、まがりまがった山道をのぼって、やっどちよう上につきました。そこは平らな草原になっていて、よく見はらしがきました。前の山は、こい緑色の木につつまれて、目のさめるようけしきです。きれいな草の上にしをおろして、みんなうまそうに水どうの水をのみました。

ひんやりとした風が気持ちよくほおをなでます。

しばらくすると、先生がひとりのおじさんをつれていらっしやいました。

「みなさん、この方は同そ
う会の青木さんです。青
木さんは、学校林のこと
をいろいろお世話してい
らっしやるので、きょう
はそのお話をしていただ



くようにおねがいました。」

と行って、しょうかいしてくださいました。

青木さんは、日やけた元氣な顔で、

「みなさん、こんにちは。よくこんなところまできてくれましたね。では、ひととお話いたしましょう。あのむこうの谷からちよう上にかけて、一面にしげっているすぎの

林が私たちの学校林です。みな

さんは、こんなすばらしい学校

林が、どうしてできたと思いま

すか。」

と行って、つぎのようなお話をし



てくださいました。

「今から四十年もまえのことです。

そのころ、村は大へんびんぼう

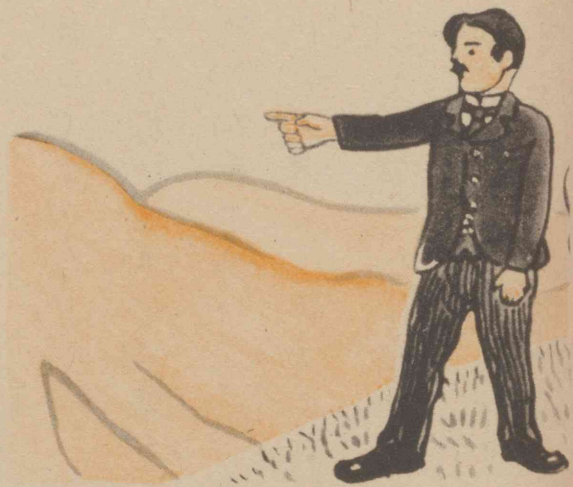
で、山ははげ山ばかりでした。

村のゆくすえを心配した村長の

大石さんと、校長の原田先生は、

どうかして、村をゆたかにした

いものだと話しあっていました。



ふたりはいろいろ考えたすえ、山に木を植えることに気がつきました。そこでふたりは村の人たちに、『山に木を植えて、村をおこそう。山がしげれば村がさかえる。村の人た

ちのくらしをよくするには、木を植えるのがいちばんいい。木を植えるのは、この村のためばかりではない。川下にたんぼを作っている村々のためにもなる。自分のためにも、人のためにも、木を植えることがなによりだ。』と熱心に植林をすすめました。

ところが、木など植えてもすぐ生活のたしにはならないから、だれもあいてにしませんでした。

しかし、ふたりはどうしても考えをかえませんでした。

よし、おとなに力をかしてもらえないなら、ひとつ子どもたちにたのもう。それには、毎年小学校を卒業する子どもたちに、卒業記念として、十本でも二十本でも木を植えてもらおう。そのうちには、村の人たちもきつと植林に心をむけてくれるにちがいない。——ふたりはこう決心しました。

これが私たちの学校林の始まりです。

私が小学校を卒業したのは、三十年もまえのことです。いよいよ学校林の植えつけに行く時のうれしかったことは、今でもわすれられません。

すぎのなえ木は学校から運ばれました。

持物は、むかしのことですから今とはだいぶかわっていました。べんとうばこは、木で作ったうるしぬりのめんぱというものでした。水とうなどというものはなかったので、

びんや、竹つつに水を入れて行きました。はきものはわら
じで、私などは一週間もまえからおじいさんに作ってもら
いました。それに、とうぐわと、かまを持って山へのぼり
ました。

高水山についてみると、青年だんの人たちの手で草や木が
かりとられ、植林する場所の地ごしらえがすっかりできあ
がっていました。

いよいよ植えつけをするこ
とになりました。はじめて
なので、なえ木となえ木の
間をどのくらいはなしてよ



いかわかりません。

それで先生は、赤いぬのを
所々につけた長いなわをは
ってくださいました。私た
ちは、それを目じるしにし
て、ざくりざくりとあなを
ほりました。なえ木が大き
くそだちますように——。

と、いのりながら、木の根

をていねいにあなの中に入れて土をかけました。その上を、
わらじばきの小さい足でしっかりふみかためました。

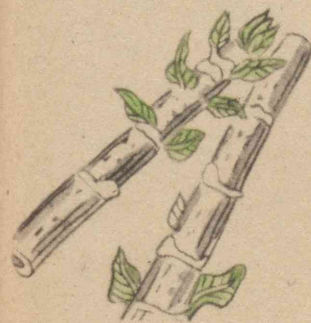
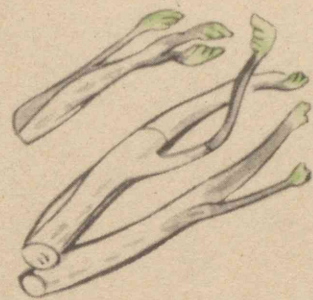


つぎつぎに植えつけられたなえ木は、春風にふかれながら
ぎょうぎよくならんでいます。『みんななかよく、どんどん
のびようね。』と、喜んでいようように思われました。

高水山のちよう上で、べんとうを食べたこ
とや、帰り道で、山うどやいたどりなどを
たくさん取って、おみやげにしたことなど
は今でもおぼえています。

みなさんのおとうさんや
おかあさんも、私と同じ

ように、卒業記念にこの学校林に植えつ
けをしてくださったのです。



ちよう上に近いところに、小さななえ木が見えるでしょう。
あれは今年卒業した人たちが、四月の植じゆ祭に植えつけ
たのです。

青木さんはここまで話して、子どものころをなつかしく思
い出すように、じつと高水山の方をながめました。

その時、そばにいたしげるさんが、

「なえ木は植えつけたままで、大きくなるのですか。」
とたずねました。

すると青木さんは、

「いや、いや、木もやっぱり人間と同じように、かわいがつ
てやらなければよくそだちません。では、どんなふうに世



話をしてやったか、そのことを
お話してみましよう。」
と、いいながら、お話をにつけまし
た。

「植林をした所には、ぎっ草やつ
る草などがしげって、せっかく
植えた木が弱ってしまいます。
そのじゃまになるものをかり取
ることを下がりといいます。

ま夏の強い日にてらされながら
かまで、身のたけよりも高くお

いしげったじゃまものを、
ばさりばさりとかりたおすのは
ゆかいなものです。

ところが下がりをしていると、

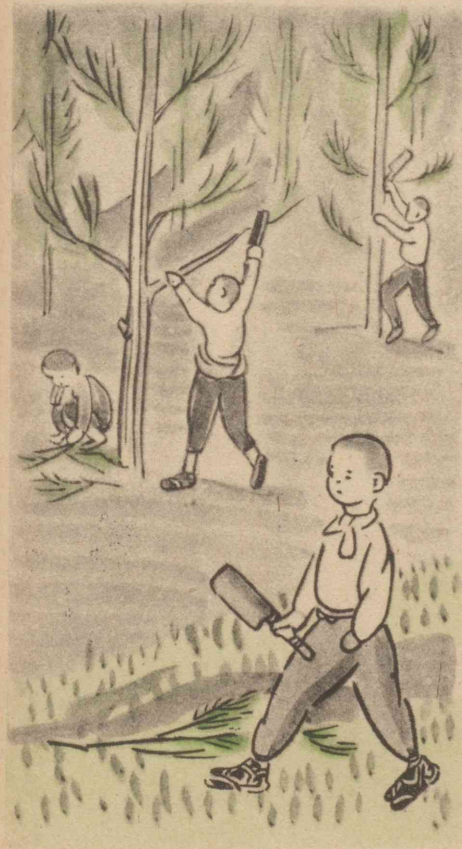
『あ、いたい。』

というさけび声が聞こえることが
あります。それはきつと
あしながばちのこうげきです。
こんな時にはよく顔や手に
大きなこぶがでます。

下がりやなん年かつづけてい
るうちに、木はだんだんのび
ていきます。そうになると、
ぎっ草もあまりはびこりませ
ん。そのつぎはえだうちとい
って、木の下えだやかれえだ
を切り落とすのです。みなさ
んは、板にふしあなのあるの
を見た

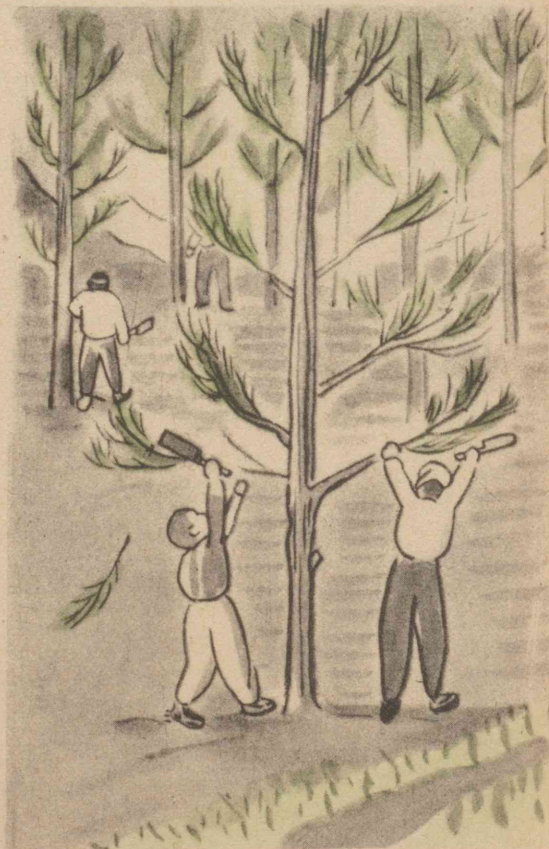
ことがあるでしょう。あのふしあなはどうしてできたのだ
と思いますか。あれは、かれえだがそのままのこり、木の
みきがどんどん大きくなって、そのかれえだをつつんでし
まったためにできたのです。

また、えだがし
げりすぎると、
日がよくあたら
ないうえに、風
とおしもわるく
なって、木のた
めによくありま



せん。害虫や、
わるいばいきん
もつきやすくな
ります。

それをふせぐた
めにも、えだう
ちをしなければ
なりません。



学校林を作った人々は、自分の植えた一本一本の木が、ち
ょうど弟や妹のようにかわいいとみえて、下がりやえだう
ちの日には、みんな出て、いっしょうけんめいに働きます。

はじめに植えた木は、もう三十年四十年とたっていますから、りっぱな柱や板にもなります。

この村の新しい中学校も、学校林の木でたてました。

学校林に小さななえ木が植えつけられたころ、村の人たちの中には、

『あれは子どもの遊びだ。長つづきするものか。』
とわらっていたものもありました。

ところが、一年一年植えつけられていくなえ木は、まるで
きょうそうでもするようになえだをはり、みきをのばしてい
きました。今まで、はげ山だった高水山は、こい緑の美し
いすがたにかかりました。これを見た村の人たちは、

『なるほど、子どもの力もばかにはなら
ない。すばらしい林になってきた。』
と、おどろいてしまいました

村の人たちは、しだいに植林にはげむ
ようになりました。そのために、村の
山という山は、すぎとひのきの林でお
おわれるようになりました。

あの大石村長さんと、原田校長先生の
ふかい考えは、とうとうりっぱに実を
むすんだのです。』

ここまで話した青木さんはみんなの顔



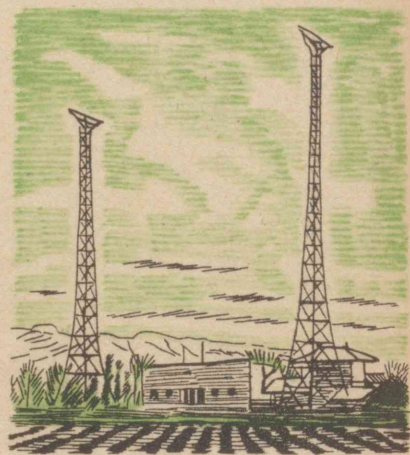
を見わたしながら、

「みなさん、木をかわいがりましょう。そうして、この村がいつまでも美しい緑の村であるように、心がけていきましよう。」

と、長い話を終りました。

(二) 放送局の見学

ぼくはラジオが大スキです。あのおもしろい「話のいずみや「二十のとびら」は、いつもかかさずに聞いています。山の中のさびしい一けん家でも、はなれ小島の燈台もりの家でも、スイッチ一つまわせば、山をこえ海をわたって聞こえて



くるラジオ、日本中いや世界中のどこにいても聞かれるラジオは、ほんとうにべんりで楽しいものです。このラジオは、どのようにして放送されるのでしょうか。

この間、放送局へ見学に行きました。大きなたてものの上には、アンテナのとうが高くそびえていました。

中にはいると、局の人が案内してくださいました。

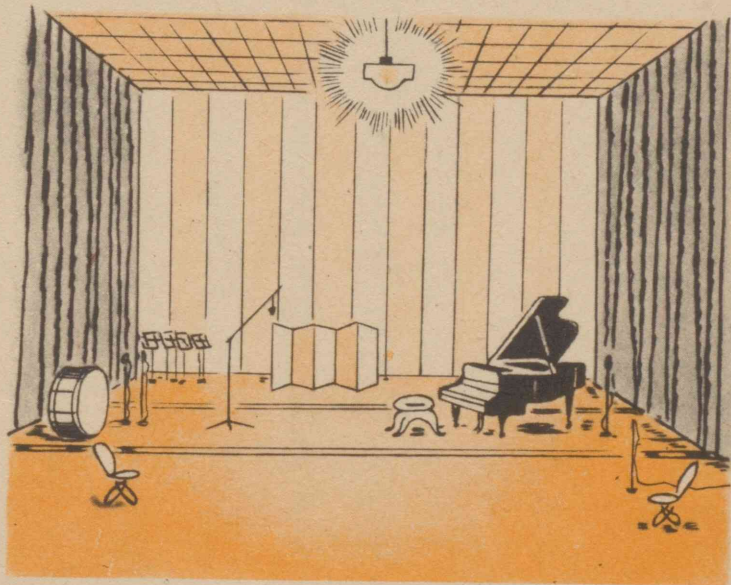
「ここが放送するへやで、スタジオとよんでいます。」

私たちは、ドアをあけて中にはいりました。ドアは、少し

も音をたてません。

へやの中には、マイクロホンや、ピアノや、いろいろな道具がありました。

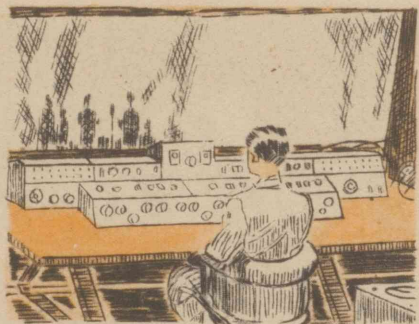
「マイクロホンには、どんな小さな音でもはいつてしまします。ですからへやの外の音の中にはいらぬように、また、放送する音がよくマイクロホンにすいこまれるように、このへやはとくべつのしかけになっています。」



と、かかりの人が教えてくれました。

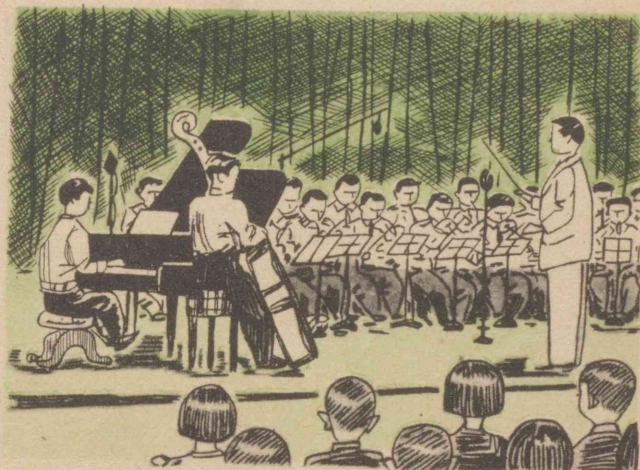
スタジオのとなりには、ガラスばりの小さなへやがあります。

このへやの中には、べつの人がいて、ガラスごしに放送のようすを見ながら、ラジオの音を大きくしたり、小さくしたりしてちょうどよい音におしたり、放送する人に、ちゅういしたりするのです。お話をする人が、下書きの紙をめくるような小さい音でも、そのままマイクにはいつてしま



ので、よほど気をつけなければならぬそうです。

「では、放送しているところを見ましよう。」



人がこうやって、ぎ音の説明をしてくれました。

「ぎ音というのは、いろいろなものの音を出すしかけです。

みなさんは、ラジオを聞きながら、雨の音や風の音、馬の走る音などを耳にするでしょう。あれはほんとうの音ではなくて、いろいろな道具を使って、ほんもののような音を出すのです。たいていは、その音をろく音してありますが、もとのしかけはこんなものです。」

どいって、いろいろなものを見せてくれました。

たいこのようなものに、じゃりを入れたのがあります。それを動かすとザラザラとじゃりがこころがりました。かかりの人がしてみると、ドブン、



私たちは、べつのへやに行きました。正面はガラスばりになっていて、いろいろな楽器を持った人たちがタクトにあわせて、いっしょうけんめいえんそうしています。私たちはそのようすを見ながら、しばらくの間美しい音楽を聞きました。

「今度は、ぎ音のかかりのへやです。べつのへやにはいると、かかりの



ザーツという大きな波の音や、サラサラという小さな波の音が出ました。ヤシの実を半分にわったもので、はこの中の土をかわるがわるたたくと、パカッ、パカッと馬のかける足音がとび出します。油紙をはって作った小さなすべり台のようなものがあります。上から小じやりを流すとバラバラ

と雨のふってくる音になるのです。また、赤貝の貝がらのギザギザをこすり合わせると、たんぼで鳴くかえるの聲が出てきます。



そのほか、ふき方ひとつで、いろいろな動物の聲を出す竹のつつもあり、また、ベルやリンの音を出すすずなどもありました。

おもしろそうに見ていた小林くんが、「ぼく、うちへ帰ったらやってみよう。」

と小さな声でいいました。

おしまいにも、またべつのへやに行つて、お話を聞きました。



「放送には、なまの放送とろく音放送とがあります。なまの放送というのは、放送する人が、マイクの前でじっさいに放送することで、ろく音放送というのは、放送しようと思

うものをレコードにろく音しておき、それをあとで放送するのです。もちろんなまの放送がよいわけですが、ろく音の方は、とっておいて、いつでもつごうのよい時に放送できるのでべんりです。」

私は、じっさいに放送する時のことについてきいてみました。

「それには、まずどんなものを放送するかという番組、つまりプログラムを作ります。それから放送の台本も作らなければなりません。これは、げきでいえば、きやく本にあたるもので、



じっさいにお話をするとおりに書いたものです。これを見ながら、お話やげきを放送するので、この台本には、ことばだけでなく、その間にどんな音楽やぎ音を入れるかということなども、書いておくのです。



放送する人たちは、この台本で、なんべんもけいこをしておきます。自分でけいこしておくだけでなく、スタジオの中で、じっさいの時と同じように練習してみて、よくなおすのです。

ラジオでは時間がなにより大切です。十五分の放送がわずかに十五分三十秒と、三十秒のびても、つぎの放送にさしつかえます。ですから三十分の放送といえ、そのまえとあとに、アナウンサーの説明がつきますから、二十八分三十秒で終るようになしておかなければなりません。また、お話の時など、聞く人の顔が目の前に見えないために、なれないうちは、どうしても、話すというよりも台本を読むようになってしまいます。こういうところに気をつけて、なさんも放送のけいこをしてごらん下さい。」

私たちは、おもしろかったきょうの見学のお礼をいって、放送局を出しました。

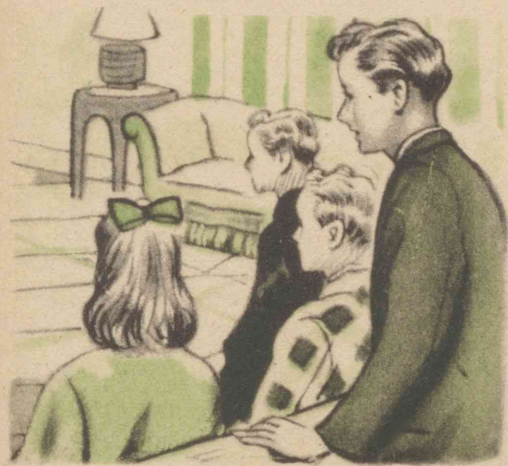
五 ジョンの馬車

(一)

ジョンが町の学校へ通い出してから、まだ一週間とたたないある日のことでした。ジョンは、同級の女友たちのジャネットの家へ、五六人の同級生たちといっしょによばれて行きました。ジョンは、この町から三十マイルもはなれた山の中のべっそう地の、ある村から、町の学校へ通っていたのです。ジャネットの家の集まりでは、いちばんおしまい、みんながなんでも自分のとくいの芸を、一つずつするということに

なりました。

サラは独唱をしました。アーサーは、ぶらんこのきよく乗りをしました。フレッドは、ローラースケートで、自分の名まえのかしら文字を書いて見せました。ジャネットは、バ



イオリンをひきました。ジャネットの弟のドンは、子馬に乗ったまま前足をおらせて、らくだのようにすわらせて見せました。

「さあ、今度は、ジョン、あなたの番よ。」

と、ジャネットがよびかけました。



「うちのいなかのおじさんは、まえから、あなたのことをほめていたわ。ジョンは、おじさんの知っている中で、いちばんりこうな子どもなんですって。だから、あなた、

きつと、すてきなことができるでしょう。」
ジャネットのおじさんというのは、ジョンと同じ村に住んでいるのでした。

ジョンは、そばかすのある顔を、まっかにしてしまいました。耳からくびまでが、まっかになつてきました。

「ぼく……ぼく、なんにもできないや。」

ジョンは、うつむいて、小さな声で早口にいいました。

「あら、だってなにか知っているはずだわ。ほんのちよっとしたことだっていいのよ。」

ジョンは、だまってくびをふりました。

「ねえさん、むりにすすめないほうがいいですよ。山の中の村では、だれも、こういう遊びをしないのかもしれないから。」

ドンは、わざとらしく、ていねいなちようしていいました。ドンが、アーサーに目くばせしているのが、ジョンにはよくわかりました。「山出し」だの、「いなかつ」だのと、ひくい声でこそそそというのが、どこからか聞こえました。みんなは、

自分をからかっているんだ。自分は、町の人たちのなかまにはなれないんだ。みんなは、りっぱな芸を持っている。が、ぼくにはなんにもできやしない——。

ジョンは、はずかしくて、はずかしくて、たまらなくなりました。十一になるきょうまで、こんなに、人前ではずかしいめにあつたことはありませんでした。ジョンは、みんなに顔を見られるのがきまりがわるいので、そろそろとしりごみをして、庭のすみに、ひとりしょんぼりとしていました。

おやつのおいスクリームが



出たので、みんな、その方に気をとられている間に、ジョンは、とうとうこっそりとにげ出してしまいました。



ジョンは、停車場までかけどおしにかけました。ジョンは、毎日、汽車で町の学校へ通っていたので、毎ばん、自分の家まで運んで行って、くれる列車の、やわらかいクッションにこしをおろすと、ジョンの目には、なみだがうかんできました。ジョンは、ジャネットやドンと、お友だちになれると思っ、どんなに楽しみにしていたでしょう。しかし、もう、そんなのぞみはすっ

かりだめです。「もう二度とジャネットたちに、顔を見られない。ジョンは、ほんとうにそう思ったのでした。

(二)

あくる日は、土曜日でした。

その日の昼すぎ、三時ごろ、ジョンは、あれほど会わないでくれればよいと思っていたふたりに、自分の村の停車場で出会ってしまいました。どうしたのか、ふたりは、いつも快活なのににあわず、ひどくしおれていました。

「ぼくたち、おじさんのところへ遊びにきたんだ。ちゃんと、まえに手紙を出しておいたんだけど、おじさんが、むか

えに出てくれないんで、ぼくたち、こまっているんだ。」
と、ドンがわけを話しました。

ジョンは、さっきから赤くなっていました。なおのこと、まっかになっていました。

「ぼく、自動車は持ってないけれど、ろ馬にひかせる荷馬車がある。それでもよければ、きみたちをおじさんの家まで送ってあげるよ。」

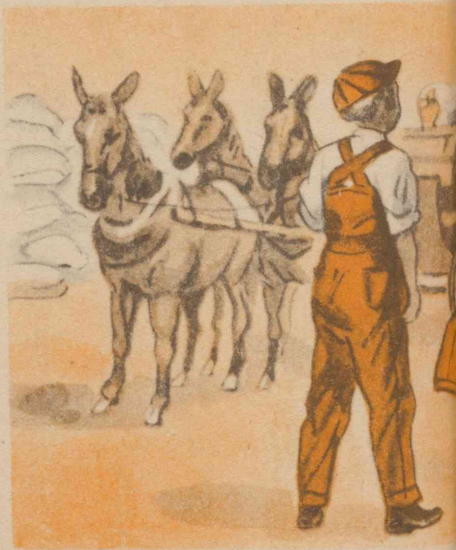
ジョンは、そいいながら、ふたりを案内して、大ぜいの労働者が、セメントを荷馬車につんでいる所へ行きました。ろ

馬が三頭でひっぱっている、その荷馬車には、もう、セメントのふくろが、小山のようにつんでありました。

「ぼく、家で、小屋をこしらえるので、馬車でセメントを運ぶのを手伝ったことがあるんだよ。」

と、ジョンはいいました。ジョンは、先にぎよ者台にあがって、それから、自分のそばへふたりをすわらせました。そうして、たづなをとると、

「はい、はい、クロ、しっかり。ブチもアオも、しっかりい



け。

と、かけ声をかけながら、けわしい山道に、三頭だての馬車を乗りあげました。ジャネットは、ジョンとならんでかけながら、その山道を見あげて、おどろきの目を見はりました。

ジョンは、ふたりにあまり話しかけてはいられませんでしたが。ジョンは、いきをきらしているろ馬のたづなをあやつつて、道のわるい所をよけさせてやったり、ブレーキをふんで、車のおともどりをふせいだり、むこうから自転車が来ると、馬車をけわしい坂道のはしによせて、道をあげてやったり、少しも、ぼんやりしてはいられませんでした。

一時間ばかりかかって、馬車はどうげのちよう上につきました。下り坂にかかる、ジャネットは、思わずかた手でドンのひざへしがみつきました。うっかりすると、二頭のろ馬のせなかへ、前のめりに、なげだされそうに思われたからです。しかし、ジョンは気をつけて、たづなを引きしめながら、ゆっくりと少しずつ坂を下りました。

坂を下りきると、ふもとには、流れの早い小川が流れていました。ジョンは、ろ馬をはげまして、それをわたりました。やっと流れをこえたと思うと、むこうがわの道へあがるまでに、流れにそった、どろ深い所を通らなければなりません。どろがやわらかいので、ろ馬の足がズブリズブリとはいりません。とうとう一頭のろ馬は、どろに足をとられてたおれてし

まいりました。ろ馬は、いっしょうけんめいにもがきましたが
どうしてもおきあがれないので、まるで、気がくるったよう
にさわぎたてました。

ジョンは、すばやく
とびおりて、ろ馬のそ
ばへかけよりました。

「クロ、しずかに。さ

あ、ぼくがきたから

だいじょうぶだぞ。」

ジョンは、クロのくび
の上からだを乗せてお



さえつけました。クロは、それでさわがなくなりました。

ドンとジャネットも、心配しておりてきました。

「ドン、きみ、この頭をおさえてくれたまえ。」

ドンは、どきまぎして、いきもよくつけないくらいでした
が、いわれたとおりになりました。ジョンは、その間に、ろ馬
たちの間にはいって、馬具をゆるめたりしていました。
しばらくして、ぱっとジョンがとびのくといっしょに、クロ
はどうさなく立ちあがりました。

三人は、また、もとのとおりに乗って、動き出しました。
ジョンは、なにごともなかったように、平気でたづなをとっ
ていました。しかし、ドンとジャネットは、なにか深く考え

こまずにはいられないようにみえました。

やがて、ドンのおじさんの家が見えてきました。すると、ドンがふいに、しみじみとしたちようしていいだ

しました。

「ジョン、三頭だての馬車を、こんな山道で、これだけ使いこなせれば、ぼくなら、どんなにいばるかしれないね。とてもすてきな芸だよ。」

「芸だって。」

ジョンは聞きかえしました。



「ああ、りっぱな芸だよ。ちっぽけな、おざしき芸じゃない。ジョン、ぼくは、きのうのことを思いだすと、はずかしくってたまらない。こんなりっぱなことのできる人をばかにするなんて——」。

「こんなことはなんでもないよ。ぼくには、きみたちのようなことが、なんにもできないんだもの。」

ジョンは、そういいながら、きゆうに、心が軽くなるのを感じました。きのうから、自分の心に重くかぶさっていた、はずかしい、かなしい気持が、きゆうになくなって、はればれとしたうれしさがこみあげてきました。こんなことが、き



のうジャネットの家で、みんながした芸と同じように、ほめられるほどりっぱなものだろうか。

「あなた、おぼえていない。」

ジャネットがいいだしました。

「この間、学校で習ったでしょう。人によって、みんなちがった力を持っているのよ。みんな、それぞれに自分のとくいというものがあるのね。ただ、あなたのは私たちのよりも大きいのよ。」



「そうだ、そうだ。」

ドンもさんせいしました。

「なぜきみは、きのうぼくが子馬のきよく芸などしている時に、『小さなおてんぐ』だといってくれなかったんだい。きみ、三頭のろ馬をこんなに使えるきみが。ねえ、ジョン、今度学校で会うまで待っていてくれたまえよ。ぼくは、みんなに、きょうのことを話してやるから。」



ジョンは、赤くなりました。耳もくびもまたきのうのように赤くなりました。しかし、きょうのジョンは幸福な気持で一ぱいになっていました。

六 水と子ども

(一) 海の子ども

「おうい、おうい。」

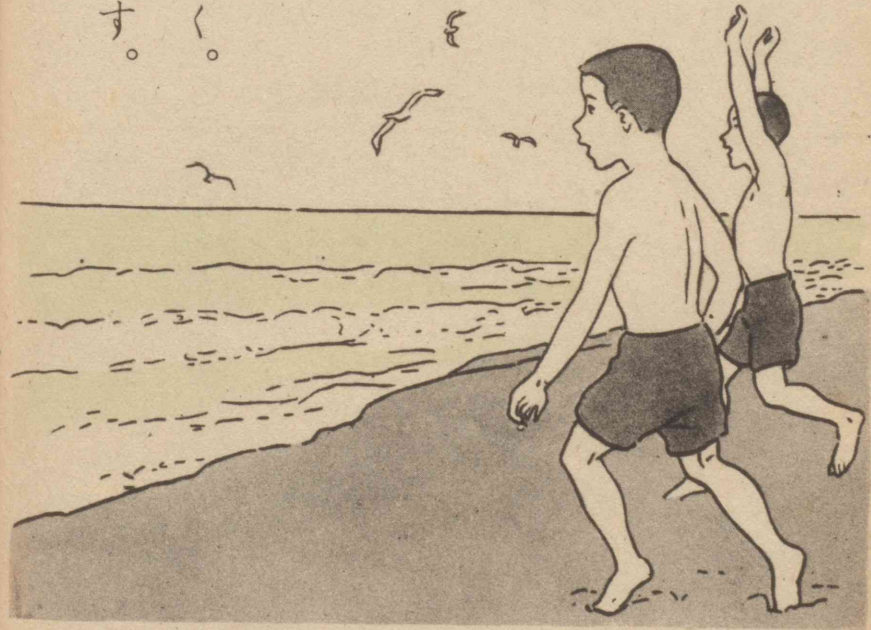
はだかの子どもがよぶ。

「おうい、おうい。」

海がこたえる。

かもめがおいでおいでとまねく。

子どもたちはつま先でかけだす。



波がおにごっこしている。

かくれんぼしている。

ごつんこしている。

子どもたちはその中へ、

手をあげてわつとどびこむ。

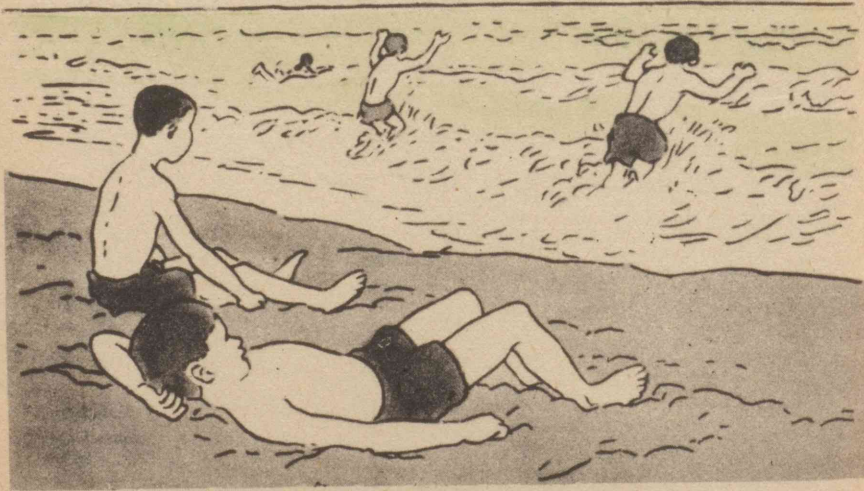
波がぱつとはねあがる。

みんなそろってすなにねころぶ。

キラギラと空がまぶしい。

目をつむると海がよぶ。

「おうい、おうい。」



青い、広い、空のむこうで、
海は子どもをよんでいる。

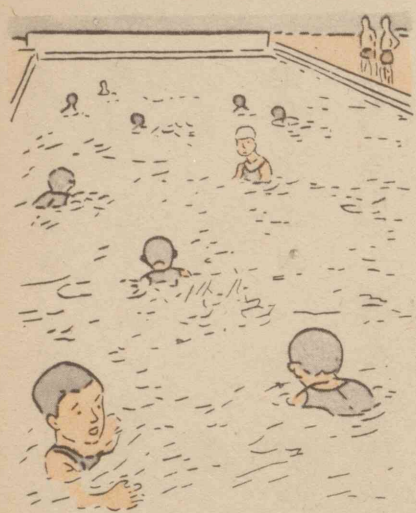
(二) 水泳日記から

七月のはじめに、学校のプール開きがありました。あきらさんは、ことしこそ平泳ぎができるようになりたいと思いました。そうして、水泳日記をつけることにしました。これは、その中の一部です。

七月十日(月) 晴

プールにつくと、まずシャワーでからだをあらった。あら

ったものからじゅんじゅんに、プールのふちに集まった。みんなはしゃぎまわっている。水に日の光がうつって、キラキラとまぶしい。水は青くすきとおって、とてもきれいだ。底の白線が、水の動いたびにゆらゆらゆれる。



平泳ぎの練習も、きょうで三日めだ。はじめは、足が思うように動かなかった。手がうまくできたと思うと、足が動かないのでしずんでしまう。先生のおっしゃるとおり動かしつつもりでも、やっぱり泳げない。犬かきなら、三メートルぐらいは泳げるのに、

平泳ぎだとしてしてもだめだ。まだまだ練習がたりないと思
った。

七月十七日（月） 晴

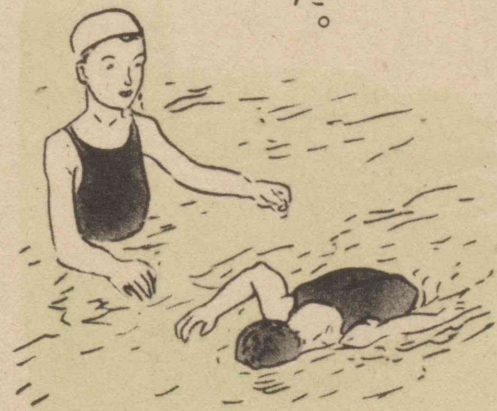
きょうは、頭を水につっこんで泳いだ。
二メートルぐらいは進むようになった。

「五メートルの線まで泳げた人は、

きゅうだいにします。」

と、先生がおっしゃった。

思いきって頭をつっこんで泳いだ。二メートルとちよっ
とで足をついてしまった。もう一度がんばった。あと五十セ



ンチというところで、苦しくなってきた。また足をついてしまった。
もう少しだったのに、ざんねんだった。けれども、両足を大
きく開いて、足のうらで水をけるようにすると、よく進むこ
とがわかった。

七月二十四日（月） 晴

きょうは、山田先生にいきのしかたを教えていただいた。
なかなかうまくできない。水をのみそうになるので、すくい
きが苦しくなってしまう。口を大きくあけて、早くいきをす
うのだ。なんべんも練習してみた。どうやら、水をのまない
ですむようになつた。うれしかった。けれども、いきをする

時、からだがしずみそうになる。そのたびに、進むのがとま
ってしまふ。

八月三日（木） 晴

きよしさんとふたりで、
午後からプールへ行った。

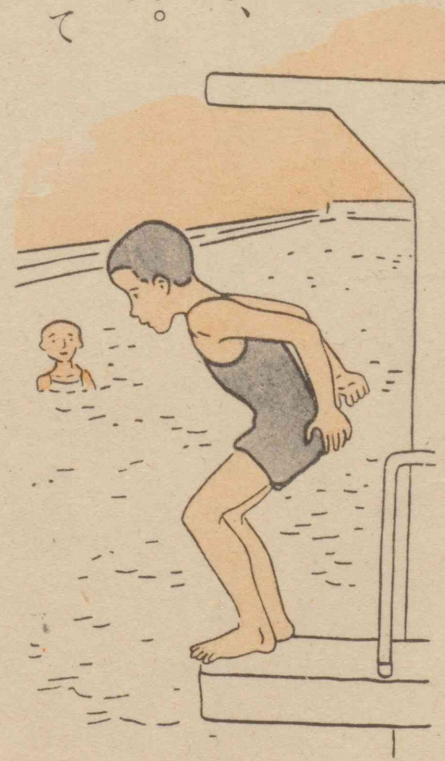
きょうはとびこみをして
みたくなった。まず、ひくい

所からやってみることにした。足がふるえてなかなかとびこ
めなかった。思いきってとびこんだ。心配したほどのことは
ない。なれてくると、おもしろくなった。しまいには、とび

こんだまま、水に頭をつっこんで泳いだ。とちゅうで二三回
いきをつくと、十メートルぐらいは泳げるようになった。

八月十五日（火） 晴

やけつくような日の光が水面にはねかえって、目がいたい
くらいだ。風が少しもない。もう顔を出していても、二十メ
ートルぐらいは泳げるようになった。けれども、つかれてく
ると、いつのまにか手と足とがべつべつになってしまふ。手
ができたと思うと、足ができない。足ができたと思うと、手
がうまくいかない。うんと練習して、夏休みの終りまでには
百メートルぐらいは泳げるようになりたい。



七 夏休みの生活発表

夏休みが終って、二学期がはじまりました。あきらさんたちの学級では、夏休みの生活の発表会を開きました。友だちのいろいろな生活がよくわかりました。その中でも、ちよ子さんの「まゆの研究」と、きよしさんの「東京から大さかまで」という長い作文がたいへんよくできていました。

(一) まゆの研究

八月十六日にいなかのおじいさんの家へ行きました。おじ

いさんの家では、かいこをかっていました。

かいこは、八月二日にた

まごからかえたのだそうです。私が行った時には、もう五れいになっていて、三四日すると、まぶしにあらるといふ時でした。

私は、かいこのことをしらべようと思って、くわをやるのを手伝いながら、よくかんさつしました。

十八日までは、一回くわを食べるごとに、かいこは目に見



えて大きくなりました。十九日になると、もうくわをやっても食べないで、くわの上にあがったり、かごのまわりで頭を動かしたりして、まゆを作る所をさがしはじめました。そういうかいこをみんなでひろって、まぶしの上ののせてやりました。

かいこは、うす黄色にすきとおって、少しちぢまっています。

私はその中の二ひきをべつにして、わらを入れたはこに入れてやりました。

時計を見ると、午前九時でした。

それから、しばらく見ていましたが、まゆを作ろうとはしないで、わらの間をあちこちとあるきまわっていました。そのうちに、ようやく場所がきまつたらしく、じっとして動かなくなりました。

「もうすぐまゆを作るわね。」

と、私がいいますと、おじいさんが、

「いや、そんなに早くまゆを作るものではないよ。からだの中のを、ふんにして出してしまっただけでないと、作らないのだよ。」

とおっしゃいました。その時は十時でした。

昼ごはんがすんでから、またかいこを見ました。しきりに



頭を動かしていました。ふんが二つ落ちていました。あちこち動いています。

十二時半、かいは糸を出して、近くのわらとわらの間にはりはじめました。

頭を左右にふりながら、どんどんほそい糸を出しています。しばらく見てから外で遊びました。

二時すぎに行つて見ると、まだまゆの形はできていませんが、だんだん白くなつていきます。かいはさつきとはんたいのむきになっていました。

少したつと、またむきをかえて、いっしょうけんめいに作っています。

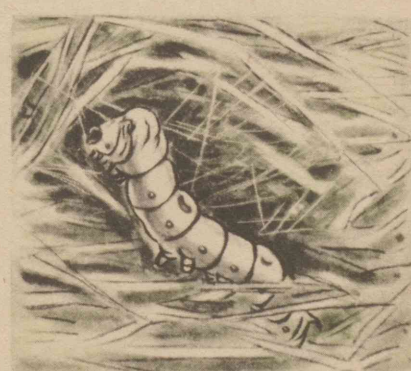
三時にはまゆの形がうすくできていました。

私は、かいがかわるがわる、前をむいた

り後をむいたりしてまゆを作っているのので、七時すぎまで、むきをかえる時間を計ってみました。そのころには、まゆがだいぶ白くなってきました。

時間を計ってみて、おもしろいと思つたことは、だいたい十分ごとにむきをかえて作るということです。

前の方をむいて十分間、頭とむねを、左右、上下、ななめ





にぐるぐるまわしながら、糸を出してまゆを作ります。今度はすうっと頭をまわして、今までとはんたいのむきになり、またさっきと同じようにまゆを作るのです。むねが中心になり、口の先までを半けいにしてまゆを作るので、両はしがまるくふくらんで、まん中の細いまゆになるのだと思いました。

ふしぎでたまらないのは、ちょうど十分たつとむきをかえることです。かいこは時計を見るわけでもないのに、よくこんなにきちんとしてくれるものだと感じました。



二十日の朝見ると、まゆはまっ白になって、かいこのからだはもう見えませんでした。その日、まゆを持ってうちへ帰りました。

二十七日の昼すぎに、一つのみゆからどのくらいの糸がとれるかと思って、おかあさんにまゆをにいていただきました。

糸口をさがして引き出しました。少し力を入れすぎると、糸はすぐ切れてしまいます。

糸まきが小さいので、なかなか



かうまくまけません。

はじめたのは、一時半ごろでした。おかあさんにも手伝ってもらって、夕方の五時半、やっとまき終りました。

糸まきに九千八百十二回まきました。



す。あの小さな一ぴきのかいこが、一キロ近い糸を出すので。私はほんとうにおどろきました。

糸まきに一回まいた長さが、だいたい九センチメートルですから、糸の長さはおよそ九百メートルになります。

(二) 東京から大さかまで

朝、早く目がさめた。きょうはおとうさんとふたりでいよいよ家へ帰るのだ。手早くしたくをして、おじさんのうちを出た。来る時は夜汽車だったが、こんどは、昼間なので、うれしくてたまらない。

電車に乗って東京駅につくと、もう大ぜいの人がプラットホームにいらんでいた。ぼくたちも、列のあとについて汽車を待った。

やがて、長い列車がホームにはいつてきたので、じゅんじゅんに乗りこんだ。ぼくは汽車の走る方へむいて、まどぎわ

にこしかけた。

午前七時半、下り「大さか行」急行列車は、汽てきを鳴らしてしずかに動き出した。

しばらくの間、町の中を走った。両がわには高いビルディングがならんでゐる。汽車が高い所を通るので、町を走っている電車や自動車が目の下に見えた。人々がいそがしそうに歩いてゐた。時々電車とならんで走ったり、すれちがったりする。そのたびにゴー



ッと大きなひびきをたてる。

「よこはま」につくと、人がどやどやと乗りこんできた。おとうさんが、

「よこはまは大きな港で、外国の船がたくさん出入りするのだよ。」

とおっしゃった。

まどから、港の一部が見えた。大きな汽船がいくそうもとまっていた。

さがみ川の鉄橋をわたると、まもなく左がわに青い海が見えてきた。しばらく行くと、右がわのおかに、こい緑



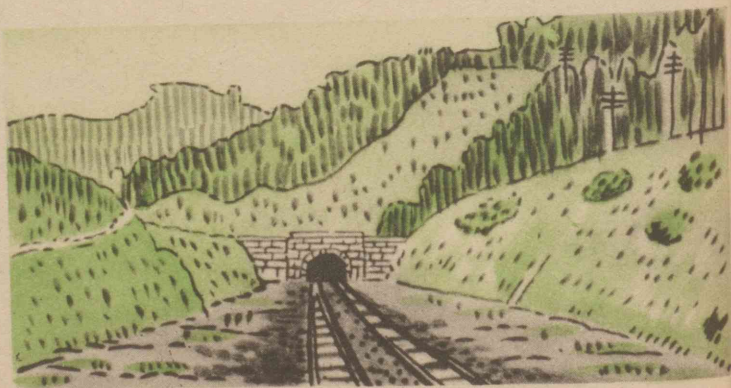
色の木がぎょうぎよくならんでいた。みかん山だそうだ。そのむこうに、高い山がつづいていいる。

「あれが、名高いはこね山だ。むかしはせき所があつて、役人が通る人たちを一々しらべたものだ。汽車もまえには、あの山のむこうがわをぐるりとまわったが、たんなトンネルができて、まっすぐに行けるので、たいへんべんりになった。」

ぼくは旅行地図を見ながら、おとうさんの話を聞いた。

汽車はがけになった海岸や、まどのあつる小さなトンネルをいくつもくぐつて、「あたみ」についた。あたみの町は山の高いところまで家がならんで、ところどころにおんせんの湯気が白く立ちのぼつていた。

あたみを出てまもなく長いトンネルにはいった。いよいよたんなトンネルだ。汽車はすさまじいひびきをたてて走る。急につめたい風が流れこんでくる。電燈がまどをかすめるとぶよぶよにすぎさつて行く。





山のいただきの方には白い雲がかかっている。
「あつ、ふじ山だ。おとうさん、ふじ山が見えるよ。」
と、ぼくは思わずさげんだ。おとうさんは、
「きょうは、雲がすこししかないのでよく見えるね。おとうさんもこんなにいふじ山を見たのははじめてだ。いいみやげ話ができたと、わらいながらおっしゃった。」

やっとトンネルを出た。急に明かなくなつたので、まぶしかった。おとうさんはうで時計を見て、
「七分ばかりかかったね。これは日本で二番めの長いトンネルで、七千八百メートルもあるが、長さよりも、ほるのに苦心したことて名高いのだよ。場所が火山のつづきになつているので、ほっているうちに、くずれたり、たきのように水がわき出したり、いろいろなこしょうがあった。出た水だけでも、はこねのあしの湖の水の三ばいもあったそうだ。だから、できあがるまでに十六年もかかったのだよ。」とおっしゃった。

しばらく行くと、右がわに、広い山のすそが見えてきた。

はじめて見たふじ山だ。ぼくは立ちあがって、いつまでもながめていた。

間もなく、茶畑があちらこちらに見えはじめた。このへんは、日本でも名高い茶の産地だそうだ。まるくきれいになりこんだ茶の木が、ぎょうぎよくならんでいる。

「そろそろお昼にしようかね。」

おとうさんは、あみだなからかばんをおろしてくださった。外のけしきをながめながら、おべんどうやおかしを食べた。

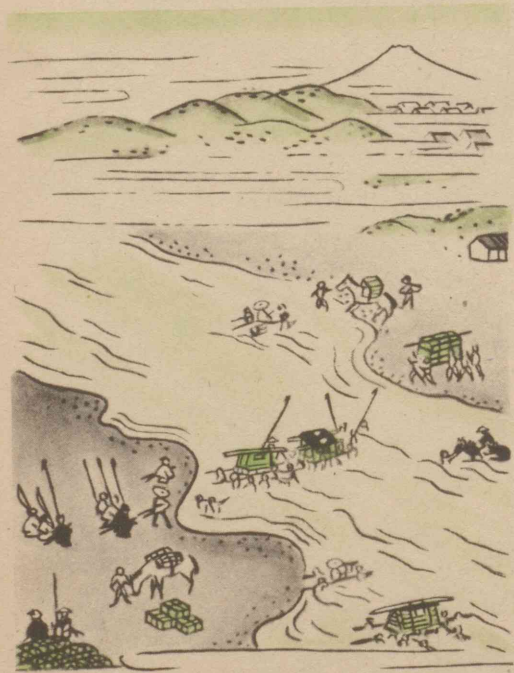
「しずおか」で、アイスクリームとお茶を買ってくださった。そのうちに、長い鉄橋をわたった。おとうさんが、

「これが大きい川だよ。むかしこの川には橋がなかったのて、

旅人はたいそうなんぎをした。

そこで、川をわたるには、人夫にかた車をしてもらったり、れんだいというものに乗ってかっいでもらったりしたものだ。ところが、雨がふりつづくとき水かさが増えて、わたるこ

とができない。雨がやんで、川の水がへるまで、いく日もいく日もやど屋にとまって待っていないければならなかった。これを川どめとって、むかしの人は



ずいぶん苦しんだものだ。そこで、

はこね八里は馬でもこすが、

こすにこされぬ大い川

という歌にまで歌われていた。」

と、話してくださった。

天りゆう川をすぎてしばらく行くと、右がわに大きな湖が見えた。これははまな湖で、海につづいていいるのだそうだ。湖のむこうに、なだらかな山々が見えて、しずかな水面には魚をとる船がたくさんうかんでいた。

右がわのまどから強い日の光がさしこむよ

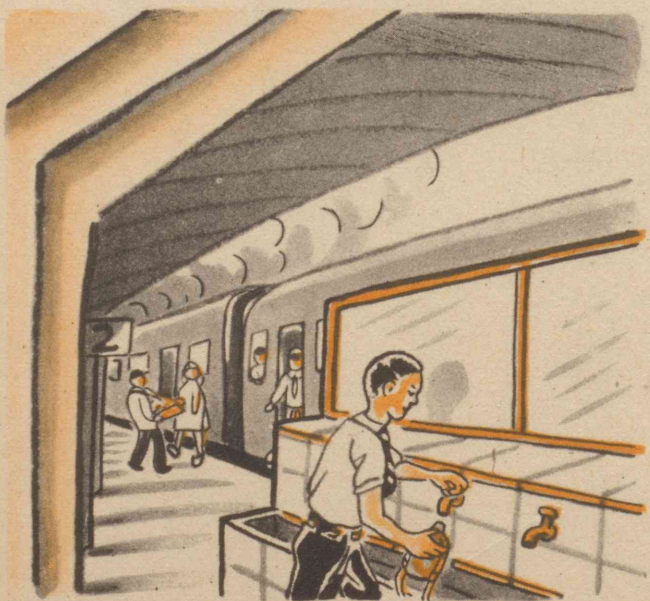


うになった。長い旅でつかれたのか、汽車の中の人たちはあちらこちらでいねむりをしている。ぼくもいつの間にかねむってしまった。

「なごや、なごや。」

駅のかく声器の大きな声で目がさめた。にぎやかに話しながら、大ぜいの人乗りおりました。おとうさんが、ホームにおりて、水どうに水をいっぱいつめてくださった。

おやつをたべながら、

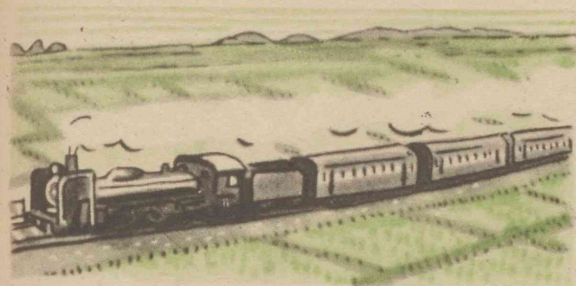


「ずいぶん大きな駅ですね。」
ときくと、おとうさんは、

「ここは、日本でも指おりの大きな都会で、あちこちから、
汽車や電車の線が集まっている。東京と京
都の間にあるので、むかしから中京とい
名がある。まわりは広いのうび平野だ。」
とおっしゃった。

それからしばらくの間、広い平野を走った。
青田がどこまでもつづいていった。

「ぎふ」をすぎると、しだいにまわりが山にな
ってきた。せみがうるさいほど鳴っていた。



長い山地をぬけて、ながめがひらけたと思うと、やがて、
「まい原」という駅についた。人が大ぜい乗りこんできた。

「ここは、日本海の方、つまりうら日本の方へ行く鉄道のわ
かれめだ。今乗りこんだのは、そちらからきた人たちだよ。」
おとうさんは地図をさして、説明してくださいました。

日がだいぶかたむいて、風がまどからすすしくはいつて来
るころ、広い水面が右手に白く光って見えた。

「これが日本一のびわ湖だよ。このへんでは、湖の一部分し
か見えない。」

と、おとうさんがおっしゃった。湖の南がわをまわって汽車
は走りつづけた。

「おおつ」を出ると間もなく長いトンネルにはいった。おとうさんが、

「この山には、水の通っているトンネルがある。それは、びわ湖の水を京都の町へひいて行くためにつくったもので、そすいといっている。そすいには小さな船が通っている。この船は京都へつくとレールに乗って、ひくい所へおり、下の池にうかぶようになっていく。このしかけのことをインクラインというのだよ。」と、めずらしい話をしてくださった。



間もなく京都についた。ここでも、たくさんの人たちがおりました。

夕食のべんとうを食べているうちに、あたりはだんだんくらくなった。

「さあ、もうじき大きかだよ。東京から大きかまでは五百五十キロあまりもある。特別急行なら、九時間たらずで走ってしまふ。こんどはそれに乗ってみようかね。」

とおっしゃった。

よど川の長い鉄橋をわたると、大きかの町のあかりが見えてきた。

午後七時半すぎに、汽車は大きかについた。

ハ ロビンソン・クルーソー

(一) 海のあらし

今から三百年ほどむかしのことです。

小さなほまえ船が、島かげ一つない大海を航海していました。この船には、ロビンソン・クルーソーたち十一人が乗っていました。

ふいにあらしがやってきました。山のような大波にもまれ、はげしい雨風にふきとばされて、船は今にもしずみそうになりました。



ロビンソンは、船乗りになってから八年にもなりますが、今度ばかりは、すっかり弱ってしまいました。

「ああ、おとうさんにいわれたとおり、船乗りなんかにならなければよかったなあ。」

ロビンソンは小さい時、おとうさんのいうことをきかずに、だまって家をとびだしてきたことをこうかいました。

しかし、もう間にあいません。あらはいく日もつづいて、ますますはげしくなるばかりです。



船はどうとう、岩の上に乗らあげてしまいました。動かなくなつた船のよこはらから大波がおしよせて、ザーツとたきのよように流れこみます。

船員たちは、ボートに乗つてのがれようと思いました。しかし、ボートはすぐ大波にのまれてしまいました。あれくるう海の中で、みんなはちりぢりになつてしまいました。

(二) はなれ島

ふと気がつくど、ロビンソンは小さな島の海岸にうちあげられていました。あらしはしづまつて、



日が高くあがっています。

そこは、人の住んでいないはなれ島でした。運よく助かつたロビンソンも、こんな島では生きていきません。あたりを見まわして、とほうにくれました。けれども、ロビンソンは、なんとかして、生きていこうと決心しました。



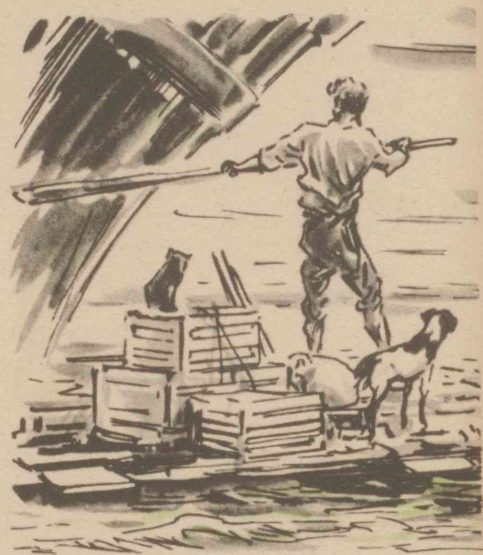
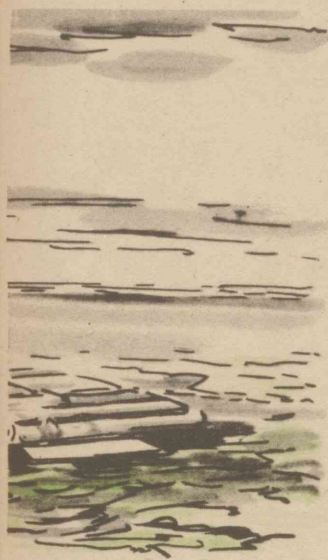
さいわい、海岸から少しはなれたところに、乗つていた船が、岩にうちあげられていました。ロビンソンは、その船まで泳いで行って食べ物をさがしました。かわいたのどに、ガ

ブガブ水をのみ、ビスケットを食べて、やっと元気づきました。それからまた、いろいろなものを見つけました。

「島でくらすには、食べ物のほかにも、家をたてる道具がいる。また、もうじゅうをふせぐためには、鉄ぼうやたまもいる。」ロビンソンはこう考えて、できるだけの品物を船の中から集めました。しかし、それを島まで運ぶのが大仕事です。

ほ柱やまるたや板をつなでし
ばって、いかだを作り、その上
に品物をのせて、なんべんも運
ぶことにしました。

生きのこっていた犬とねこが、



いかだにとび乗ってきた時には、
ほんとうにうれしくなりました。
毎日いかだで船に行つて、ハ
ンモックやほなど、できるだけ
たくさんのものを持ってきまし
た。そのうちに、船は海にしず
んでしまいました。

ロビンソンは、海岸の近くに、船のほでテントを作りました。やっとひと安心したロビンソンは、テントの中でぐっすりとねむりました。

(三) 新しい生活

はなれ島の生活がはじまりました。犬やねこがロビンソンをなくさめてはくれますが、話しあいてのないさびしいくら
しです。

そのうちに、船から運んだ食べ物も、しだいに少なくなっ
てきました。

ロビンソンは、鉄ぼうをかついで、島の鳥やけものをうち
に出かけました。また、テントの家は心配なので、岩やを作
らうと、毎日働きつづけました。

「この島にきてから、いく日になるだろう。流れついたのは、
たしか九月三十日だった。しるしをつけておかないと、日
をわすれてしまう。」

ロビンソンは、さっそ
く大きな柱をつくり、

一六五九年九月三〇日

この島に上陸

と書いて、はじめに流れ
ついた場所に立てました。

そうして、柱に、毎日、ナイフですじをつけることにしまし
た。日曜日は長いしるし、毎月一日は、うんと長いしるしと
いうようにきめました。こうして、ロビンソンの柱ごよみが
できあがりました。



こんどは日記をつけはじめました。毎日時間わりをつくつて、くらしをきちんとするようになりました。



天気の良い日は、朝のうち二三時間、鉄ぼうを持って、かりに出かけました。島にはやぎがいました。がんにした海鳥もいました。このやぎと海鳥のおかげで、ロビンソンはいのちをつなぐことができました。

暑いので、からだかとてもつかれます。昼ごはんのあとは、昼ねをしてからだを休めました。夕がたになると、また、いろいろな道具を作ったり、住むところをなおしたりして、心に働きました。

夜は星空の下で、犬やねこといっしょに食事をしました。あとになって、おうむが一わ、家ぞくのなかまいりをしました。これはロビンソンがかりに行った時つかまえてきたのです。



ロビンソンは、おうむにことばを教えました。おうむをあいてにお話をして、心をなぐさめました。

(四) 生きるくふう

ロビンソンは、時々、後の小山にのぼって、海をながめました。けれども、目にはいるものは空と海ばかりで、一そりの船も見えません。イギリスへ帰るのぞみはまったくありませんでした。

しずむ心をふるいおこして、いそがしく働くうちに、月日はゆめのようすぎにいききました。

ロビンソンの柱ごよみには、ナイフのきずがふえて、どうとう、新しい年の一月一日がきました。

「国では、みんな正月をいわっているだろう。雪がまっ白につもっているだろう。」

ロビンソンは、なつかしく自分の家を思いだしました。

ところがこの島は、来る日も来る日も、やけつくような暑さです。二月のなかばごろから、毎日のように雨がふりつづきました。雨がふっては、かりに出られないので、食べ物にこまっしてしまいます。

ロビンソンは考えました。

「鉄ぼうのたまも、そのうちにはなくなってしまうだろう。」

ある日、ロビンソンは、どうとうやぎの子をいけどりにしました。それからなんびきかつかまえて、かこいの中にいれ、だんだんならしていききました。

ロビンソンは、家の近くに、青々とした草の芽が出ている

のを見つけてきました。しばらくすると、それがすすくすくとのびていきました。

「おや、イギリスの大麦ににているぞ。」

ロビンソンはびっくりしました。

毎日気をつけて見てみると、とうとう麦のほが出ました。たった十本ぐらいのほですが、りっぱにみのりしました。

「これはありがたい。一つぶもむだにしないでまいてみよう。」

ロビンソンは、畑を作ってそれをまきました。



今度は、いねのはえているのを見つけてきました。これも麦と同じように、たねをとって畑にまきました。

この麦や米は、船から持ってきた鳥のえさぶくろの中にあつたものです。それが、こぼれ落ちてしぜんにはえたのでした。長い雨は、四月のなかばごろやんで、それから、毎日よい天気がつづきました。そこで、このへんは、雨のふるきせつと、かわいたきせつのあることがわかりました。

ある日、ロビンソンは、今まで行ったことのない森へはいつてみました。めずらしいくだものがたくさんあっていまし



た。中でもロビンソンを喜ばせたのは、ぶどうでした。ロビンソンはそのみをとって、ほしておき、ほしぶどうにしてたくわえました。

それからいく年かたちました。国へ帰れる日はきませんでしたが、いろいろなくふうのおかげで、生活はだんだん楽になってきました。

麦や米もしいに多くとれ、やぎのちちものみきれないくらいになりました。それをしまっておくために、ねん土でつぼを作りました。なべやどびんも作りましたから、パンでもおかゆでも、ほしい時にはいつでも食べられるようになったのです。また、やぎの皮で、きものを作ったり、かさを作っ

たりしました。やぎのあぶらでろうそくも作りました。

ある日、ロビンソンは、しげった森の中で大きな岩を見つけました。この岩やは、入口は小さいが、中は広く、天井ようもかべもりっぱに見えました。地面も平らな石がしいてありました。ロビンソンは喜んで、そこへうつり、まわりにかきねを作って木を植えたので、外からは人が住んでいるようには見えませんでした。

ロビンソンは、だいくになったり、かりうどになったり、



ひやくしようになつたりして、なんでもひとりでやりました。いろいろしっぱいしながらも、くふうをかさねて、くらしをよくしていきました。

こうしてくらしている間にも、ロビンソンは、海をわたる船のことをけつしてわすれてはいませんでした。

「いくら待つても船はこない。大きな船はむりだろうが、小さい船なら作れるだろう。」

そこで、大きな木をきりたおしました。木づちのみで、

毎日こつこつとまる木船をほりつづけました。いく月もかかって、やっとそれができあがりしました。ところが、こ



の船を海ばたまで運ぶことができせん。そこでこんどは、海に近い所でもう一度まえより小さいのを作りました。ロビンソンは、この船の所まですなをほって水を流し、やっと船をうかして海まで運びました。しかし、海の大波をのりきることはとてもできません。こうしていろいろうちに、月日はえんりよなくすぎていきました。この島に流

れついでから、もう十年もたつてしまいました。

(五) フライデー

ある年のことです。ロビンソンが海岸をあるいていると、人の足あとがありました。自分の足あとかと思つて、足をのせてみると、まるでちがう大ききさでした。ロビンソンはびつくりしました。

「人のいない島だと思つたのに、人食い土人がいるのだらうか。」

ロビンソンは大急ぎで家に帰り、さっそく鉄ぼうにたまをこめて、あたりをけいかいしました。けれども、別にかわつたこともありませんでした。

それからまたなん年かたちました。ある日、ロビンソンは、朝早く畑に行こうと思つて、家を出ました。すると、遠くの

方に火が見えました。このまえ、ロビンソンが人の足あとを見つけたあたりです。ロビンソンはぎよつとしました。

さっそくぼうえんきようを持ち出し、うらの小山にのぼつて、その方をながめました。すると、もえる火をかこみながら、なにか食べているおそろしい土人たちのすがたが目にはいりました。よく見ると、すなはまにはまる木船が二そうならんでいます。

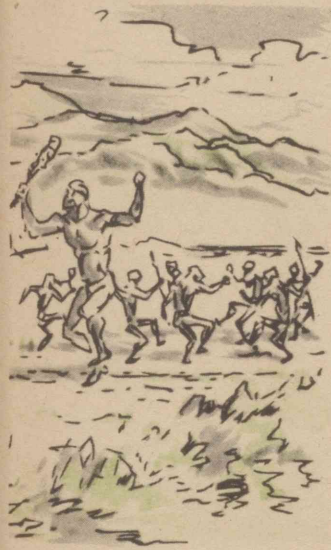
やがて、しおがみちてくると、土人たちは、まる木船に乗りこんで、どこかへ行ってしまいました。



ある年 海岸に、まる木船が五そうあらわれました。岸につくと、船の中から土人が三十人ぐらいとび出してきました。ロビンソンが、鉄ぼうにたまをこめて、小山の上からじつとようすをながめていると、ほりよらしい土人が、船からひき出されてきました。人食い土人たちは、そのまわりに集まっていたき火をしながら、にぎやかにさかもりをはじめました。

おかしなみぶりで、おどったり歌ったりしています。

すると、ほりよらしい土人が急にこちらをむいてかけだしました。あとからふたりの土人が



追いかけてきます。つかまったら食いころされてしまうでしょう。

ロビンソンは、にげて来る土人を助けてやろうと決心しました。

すぐ小山をかけおり、近道をして海岸に出ました。そうして、「おうい、おうい。」

と、にげる土人を手まねきしました。

おいかけてきた土人は、思いがけない人間がとび出してきたので、びっくりして立ちどまりました。そのひまに、ロビンソンは、土人の手からほりよを助け出しました。

ロビンソンは、やさしい顔で手まねきしました。土人はびくびくしながらも、だんだんそばによってきました。なにかしゃべりましたが、ロビンソンにはわかりません。けれども、二十なん年ぶり、はじめて人間の声を聞いたのです。ロビンソンは、助けた土人を家につれて帰りました。水をのませたり、パンやほしぶどうを食べさせたりして、ねどこに休ませました。



その日から、この土人は、ロビンソンのそばで働くようになりしました。ロビンソンはこのわかものに、フライデーという名まえをつけました。その日がちょうど金曜日（フライデー）だったからです。

フライデーは、ロビンソンによくなつきました。ロビンソンは、英語の話しかたや、麦や米の作りかたなど、いろいろなことを教えました。新しいなかまができたので、うれしくてたまりません。はだかのフライデーは、毛皮のきものやぼうしをもらって大喜びでした。

(六) 帰る日まで

ロビンソンとフライデーは、力をあわせて働きました。畑

は広くなって、麦や米がたくさんとれました。やぎもふえたので、バターやチーズを作りました。ほしぶどうもたくさんたくわえることができました。

ある日のことです。

「ご主人さま、たいへんです。」

と、フライデーがあわててかけつけました。聞けば、土人たちの船がやってきたというのです。

ロビンソンはすぐに、フライデーと、鉄ぼうを持ってかけ出しました。

ぼうえんきょうでようすを見ると、

三そこのまる木船に乗りこんだ二十人

あまりの土人たちが、ふたりのほりよをつれて来るようすです。そのほりよのひとりには、白人でした。ほりよを船からおろすと、また、そのまわりに集まっておどりはじめました。やがて、白人のなわをといて、いよいよ食べよ



うとするようです。

ロビンソンはすぐに鉄ぼうをうちました。土人たちは、手にゆみや刀を持ってむかってきました。

はげしくたたかった後、白人と、もうひとりの土人のほりよを助けました。

その白人は、なん船した船に乗っていたイスパニア人で、もうひとりのほりよの土人は、意外にも、フライデーの父親だったのです。親子はだきあって喜びました。

それから、四人なかよく力をあわせて働きました。

その後、ロビンソンはイギリス船に助けられて、三十年ぶりになつかしい国へ帰ることができました。



学習の手引

一 まっすぐな道

- 1 みじかい詩です。声を出してなんべんも読んでみましょう。詩の心持をよくあらわすには、どのように読んだらいいか、くふうしてみましよう。
- 2 まっすぐな道は、どんな場所にある、どんな道ですか。その道を、どんな気持ちで歩いていきますか。
- 3 この詩を読んで、どんなことを感じましたか。感じたことを、みんなて話しあったり、文に書いたりしてみましよう。
- 4 いろいろな詩の中から、すきな詩を書き

二 学級新聞

- ぬいて、詩集を作りましよう。
- あきらさんの組の学級新聞は、どんなじやんどよて、できあがりましたか。(一)(二)(三)の全体をよく読んで、おもなことから書きぬきましよう。
- (一) 話しあい
- 1 学級そうだん会は、どんなことをする会ですか。みなさんの学級では、どんなことを話しあいますか。
 - 2 学級新聞の話しあいて、どんな考えが発表されましたか。みなさんの組の新聞どくらべて、自分の考えを書いたり、話しあったりしてみましよう。
 - 3 あきらさんは、話しあいをどのように進めて行きましたか。話しあいを進める

には、どんなことがたいせつですか。

4 この話しあいできまったことを、書きぬいてみましょう。

(二) 編集集

1 編集というのはどんな仕事ですか。しげるくんたちは、編集について、どんなことを話しあいましたか。

2 そうだんできまったことを、みよ子さんは、どのようにまとめて書きましたか。ふつうの文と、書きあらわしかたのちがうところをしらべてみましょう。

3 新聞のできあがるまでのじゅんじよを考えて、つぎの()に番号をつけなさい。

() 全体をよく見てなおす。

() げんこうをたのんだり書いたりする。

() 新聞にのせる場所をきめる。

しょう。

3 「これはだれてしょう。」「やさしい友だちがここにもいる。」の文は、友だちのどんなことをあらわしたものでですか。

書きあらわしかたや、題(記事のみたし)のつけかたについて、しらべてみましょう。

4 三つの詩は、それぞれ、どんなようすや感じをあらわしたものでですか。この中から、すきな詩をえらんで、ふつうの文に書きなおしたり、このような詩を作ってみたりしてみましょう。

5 図書がかりは、どんなことを組の人たちに知らせていますか。学級のいろいろなかかりから、組の全体の人に知らせる記事をくふうしてみましょう。

() 紙にせいしよする。絵も入れる。

() げんこうを集めてせいりする。

(三) 第一号

1 これは、第一号の中の記事の一部です。文の全体を読んで、つぎのことを考えてみましょう。

○ (一)の話しあいできまったことが、どの記事にあらわれていますか。

○ どの記事がよいと思いますか。それはなぜですか。

○ このほかに、どんな記事を入れたいと思いますか。

2 「校長先生のことば」を読んで、感じたことを話しあきましょう。

先生や、町の人たちをたずねて、新聞の記事にするざいりょうを集めてみま

(四) 自分の組の学級新聞について、記事や編集のしかたなどで、気のついたことをいろいろ話しあいましょう。そうして、りっぱな新聞を作りましよう。

三 私のですきな話

(一) ぬれた本

1 リンカーンの少年時代の話です。この話を読んで、リンカーンの感心なところを書きぬいてごらんください。

2 リンカーンは、その後、どんな働きをした人か、先生にきいたり、本を読んだりして、しらべてみましょう。

(二) ナイチンゲール

1 ナイチンゲールの少女のころの話です。この話で、ナイチンゲールがどんな心を持った人だということがわかりますか。

2 ナイチンゲールについて、つぎのことをしらべてみましょう。

○ いつごろの人か。どこの人か。

○ どんな働きをしたか。

○ 赤十字社は、どんなしくみで、どんな事業をするのか。赤十字社の仕事と、ナイチンゲールのしたこととを、くらべてみる。

(三) いのししの絵

1 おうきよは、ねているいのししの絵をかこうと思つて、どうしましたか。

2 山のいのししの死んだことを聞いて、「なるほど、そうだったのか。」と思つたのは、なぜでしょう。

3 この話から、おうきよは、絵をかくことについて、どんな考えを持っていたか。

どころがちがつていたと思ひますか。

4 つぎのことをしらべて書きましょう。

○ 「下がり」のいみと下がりをするわけ

○ 「えだうち」はなぜたいせつか。

5 家の庭や、学校えんなどに、木を植えてそだてましょう。そうして、それを文に書いてみましょう。

(二) 放送局の見学

1 みなさんは、ふだん、ラジオのどんな放送を聞いていますか。それについて感じたことを、友だちと話しあつてみましょう。

2 放送局の中には、どんなへやがありますか。どんなしかけになっていますか。

3 ラジオがじつさいに放送されるまでには、どんなじゆんじよで用意をしますか。

とがわかりますか。

(四) 三つの話を読んで、感じたことを文に書きましょう。

いろいろな本を読んで、心にのこるような話を集めてみましょう。

四 楽しい見学

(一) 学校林

1 高水山の学校林は、どのようにしてできあがつたものですか。

2 大石村長と原田校長先生は、どんな考えから、植林を計画したのですか。ふたりの仕事を、みなさんはどう思ひますか。

3 高水山に、小さなえ木が植えつけられたころ、村の人たちはそれを見て、なんといつていましたか。村長や校長先生の考えと、村の人たちの考えは、どんな

4 ぎ音には、どんなものがありますか。

書きぬいてみましょう。

5 なまの放送と、ろく音放送とは、どんなところにちがひがありますか。

6 友だちと放送台本を作つて、学校で放送したり、そのようすを文に書いたりしてみましょう。

(三) 見学したことを、このような文に書くけいこをしてみましょう。

五 ジョンの馬車

1 ジャネットの家の集まりで、みんなはどんな芸をしましたか。

2 ジョンが、みんなにすすめられても芸をしなかつたのはなぜですか。その時のジョンの心持を考へてみましょう。

3 ジョンが自由に馬をあつかうのを見て、

友だちはどう思いましたか。ジョンはどうしてそんなうてまえになったのでしょうか。4 ジョンの芸を見て、みんなはどんなことをはんせいしましたか。それについて話しあいをしましょう。

5 ジョンは、どんな子どもだと思いますか。また、お話全体を読んで感じたことを文に書いたり、話しあったりしてみましよう。6 つぎのことばを使って、短い文を作ってみましよう。

得意。わざとらしく。すばやく。

六 水と子ども

(一) 海の子ども

1 この詩は、どんなところの、どんな感じをあらわしたものでですか。
2 この詩の、どこがすきですか。よいと

思うところを書きぬいてみましよう。

3 詩の心持がよくあらわれるように、くふうして読みましよう。
4 海の詩を集めたり、自分で作ったりしてみましよう。

(二) 水泳日記から

1 平泳ぎの練習で、むずかしかったのはどんなことですか。どのように、練習しましたか。
2 八月十五日までに、どのくらい泳げるようになりましたか。これから気をつけて練習するのは、どんなことでしょうか。
3 水泳の練習で、苦心したことを友だちと話しあってみましよう。
4 このような水泳日記や、ほかの運動の日記を書いてもらんなさい。

七 夏休みの生活発表

夏休みには、どんな生活をしましたか。おもな仕事をまとめて、てんらん会や、発表会をひらきましよう。

(一) まゆの研究

1 礼子さんは、まゆの研究をどのようにまとめていますか。
かんさつや、記ろくのしかたで、よいと思うことを書きぬいたり、話しあったりしましよう。
2 この文をもとにして、みんなにお話するような気持で、発表のけいこをしてみましよう。
3 動物や植物をそだてて、かんさつ日記や、かんさつの記ろくを作り、みんなに発表しましよう。

(二) 東京から大きかまで

1 地図どくらべながら、この文を読んで、いろいろしらべてみましよう。
2 この旅行記に書いてあることがらを、つぎのように分けて、書きぬいてみましよう。
○ 目に見えるけしき。
○ 耳に聞こえるもの音。
○ おとうさんの説明。
3 旅行したことを、このような文に書いたり、友だちと話しあったりしましよう。
八 ロビンソン・クルーソー
1 「ロビンソン・クルーソー」は、イギリスのダニエル・デフォーという人の書いた、名高いものがたりです。この文は、その話のあらすじを書いたものです。くわしいこ

とは、べつの本でしらべてみましょう。

2 はじめに全体を読んで、おもしろかったところや、感じたことを書いてみましょう。

3 ロビンソンは、はなれ島での生活を始めるために、どんな用意をしましたか。船から運んだものについて考えてみましょう。

4 この「はなれ島」は、私たちの住んでいる所と、どんなところがちがいますか。めずらしいこと、かわっていることを書きぬいてみましょう。

5 はなれ島の生活で、ロビンソンがくふうしたことを書いてみましょう。

○ 住む家のこと。

○ きもののこと。

○ 食べ物のこと。

書いたものを持ちよって、友だちと話し

あつてみましょう。

フライデーがきてからの生活と、そのまへの生活をくらべてみましょう。

7 三十年あまりも、はなれ島でくらしただけの間、ロビンソンにとって一日もわすれられなかったことはどんなことだと思えますか。

8 このものがたりのすじをよくおぼえて、お話をしたり、紙しばいや、げきなどにして、みんなを発表しあいましょう。

9 この話のように、めずらしい土地のことや、新しい土地をたんけんした話を、ほかの本でいろいろ読んでみましょう。



新しく出たおもなことば

アイスクリーム	73	いたどり	50
赤貝	64	一けん家	58
あしながばち	53	糸まき	101
あともどり	78	いのしし	38
油紙	64	岩や	124
あみだな	110	インクライン	116
あやつつ(て)	78	いんさつし(た)	9
あわてもの	28	植えつけ	48
あれくるう	120	うす黄色に	96
アンテナ	59	うら日本	115
いかた	122	うるしぬり	47
意外にも	144	えさぶくろ	131
いけどり	129	えだうち	53
意見	9	えんそうし(て)	62
		おいしげつ(た)	53
		おいてけぼり	19
		おうむ	127
		大麦	130
		おかゆ	132
		おざしき芸	83
		おてんぐ	85
		下りきる	79
		おんせん	107
		女友だち	69
		快活な	75
		害虫	55
		かいこ	95
		かがやかしい	5

しがみつき(ました) 79
 始業 21
 いげりすぎる 54
 しずまつ(て) 120
 下えた 53
 下がり 52
 じっさい 38
 しっぶ 36
 写生し(ました) 39
 シャワー 88
 主人公 27
 じゅんじゅんに 89
 しょうかいし(て) 44
 しょうじ 25
 上陸 125
 植じゆ祭 51

51 125 25 44 89 27 88 39 36 38 52 53 120 54 21 79

植林 46
 女工さん 26
 しょんぼりと 21
 水泳日記 88
 スイッチ 58
 スタジオ 59
 すなはま 137
 すばやく 80
 炭売り 40
 すれちがっ(たり) 104
 生活発表 94
 青年だん 48
 赤十字社 34
 せき所 106
 せつかく 52
 セメント 76

76 52 106 34 48 94 104 40 80 137 59 58 88 21 26 46

船員たち 120
 ぞうさなく 81
 そすい 116
 そばかす 71
 卒業記念 46
 村長 45
 だいく 133
 タクト 62
 大どろりょう 31
 台本 66
 竹つつ 48
 たづな 77
 チーズ 142
 近道 139
 地ごしらえ 48
 父親 144

144 48 139 142 77 48 66 31 62 133 45 46 71 116 81 120

かく声器 113
 火山 108
 かしら文字 70
 かた車 111
 楽器 62
 学級新聞 6
 学級そうだん会 6
 学校林 42
 カット 13
 かへ新聞 9
 ガラスばり 61
 かりうど 133
 川どめ 111
 かんさつ日記 14
 ぎ音 62
 記事 8

8 62 14 111 133 61 9 13 42 6 6 62 111 70 108 113

木うち 134
 気ばつ(て) 5
 きやく本 66
 キャッチボール 24
 急行列車 104
 きゆうだい 90
 局 59
 きよく乗り 70
 ぎよ者台 77
 切り落とす 53
 銀バス 4
 草原 42
 下り坂 79
 クッシュン 74
 くわ 95
 芸 69

69 95 74 79 42 4 53 77 70 59 90 104 24 66 5 134

毛皮 141
 げんこう 14
 航海し(て) 118
 こうげき 53
 校長先生 17
 子馬 70
 ご主人さま 142
 こしょう 108
 こすり合わせる 64
 こみあげ(て) 83
 さか立て 40
 さかもり 138
 さし絵 13
 ざんねんだつ(た) 91
 産地 110
 三頭だて 78

78 110 91 13 138 40 83 64 108 142 70 17 53 118 14 141

話のいずみ 58
 はなれ小島 58
 はば広い 4
 番組 66
 ハンモック 123
 人食い土人 136
 ひとりぼっち 22
 ビスケット 122
 ひやくしょう 134
 表紙 27
 平泳ぎ 88
 ビルディング 104
 ひんやりと 43
 船乗り 119
 プラットホーム 103
 ブレーキ 78

78 103 119 43 104 88 27 134 122 22 136 123 66 4 58 58

プログラム 66
 ベつそう地 69
 ベル 21
 編集 10
 べんりて 59
 ぼうえんきょう 137
 ぼうさん 34
 放送局 58
 ボート 120
 ホーム 113
 星空 127
 ほしぶどう 132
 ほそらし(た) 4
 ほ柱 122
 ほまえ船 118
 ほりよ 138

138 118 122 4 132 127 113 120 58 34 137 59 10 21 69 66

ほんのりと 24
 マイクロホン 60
 前のめりに 79
 まくらもと 31
 まゆ 94
 まる木船 134
 まるた 122
 まん画 8
 水かさ 111
 港 105
 身のたけ 52
 見はらし 42
 みやげ話 109
 むりだ 134
 目くばせし(て) 72
 目じるし 49

49 72 134 109 42 52 105 111 8 122 134 94 31 79 60 24

ちぢまつ(て) 96
 地平線 5
 使いこなせ(れば) 82
 つつきつ(て) 4
 つば 28
 鉄橋 105
 鉄どう 5
 鉄ぼう 122
 転校し(て) 22
 電柱 5
 ドア 59
 同級生 69
 道具 60
 どうぐわ 48
 同そう会 43
 燈台もり 58

58 43 48 60 69 59 5 22 122 5 105 28 4 82 5 96

どうひょうし(て) 14
 童話集 27
 都会 114
 どきまぎし(て) 81
 独唱 70
 特別急行 117
 図書がかり 26
 土人 138
 トラック 4
 どろ深い 79
 ナイフ 125
 名高い 27
 なだらかな 112
 なんぎ 111
 なん船し(た) 144
 二十のとびら 58

58 144 111 112 27 125 79 4 138 26 117 70 81 114 27 14

荷馬車 76
 日本海 115
 ニース 8
 人夫 111
 むの 49
 熱心に 31
 ねん土 132
 のうび平野 114
 乗りあげ(ました) 78
 バイオリン 70
 ばいきん 55
 馬具 81
 はしやぎまわつ(て) 89
 柱ごよみ 125
 バター 142
 発行する 13

13 142 125 89 81 55 70 78 114 132 31 49 111 8 115 76

害 <small>がい</small>	卒 <small>そつ</small>	社 <small>しゃ</small>	童 <small>どう</small>	引 <small>ひ</small> いて	編 <small>へん</small>	広 <small>ひろ</small> い
(55)	(46)	(34)	(27)	(18)	(10)	(4)
働 <small>はたら</small> き	念 <small>ねん</small>	湯 <small>ゆ</small>	活 <small>かつ</small>	業 <small>ぎょう</small>	第 <small>だい</small>	銀 <small>ぎん</small>
(55)	(46)	(36)	(27)	(21)	(13)	(4)
局 <small>きょく</small>	決 <small>けつ</small>	喜 <small>よろこ</small> んで	館 <small>かん</small>	転 <small>てん</small>	仕 <small>し</small>	平 <small>へい</small>
(58)	(47)	(38)	(30)	(22)	(15)	(5)
案 <small>あん</small>	週 <small>しゅう</small>	写 <small>しゃ</small>	伝 <small>でん</small>	昼 <small>ひる</small>	全 <small>ぜん</small>	柱 <small>ちゅう</small>
(59)	(48)	(39)	(31)	(25)	(16)	(5)
内 <small>ない</small>	祭 <small>さい</small>	緑 <small>みどり</small>	熱 <small>ねつ</small>	燈 <small>とう</small>	号 <small>ごう</small>	進 <small>すす</small> めて
(59)	(51)	(42)	(31)	(26)	(17)	(7)
具 <small>ぐ</small>	弱 <small>よわ</small> って	面 <small>めん</small>	後 <small>のち</small>	図 <small>と</small>	始 <small>はじめ</small> めた	詩 <small>し</small>
(60)	(52)	(44)	(34)	(26)	(18)	(8)
器 <small>き</small>	板 <small>いた</small>	植 <small>う</small> える	代 <small>だい</small>	公 <small>こう</small>	終 <small>おわ</small> り	画 <small>が</small>
(62)	(53)	(45)	(34)	(27)	(18)	(8)

新しく出たかん字

湯気	ゆくすえ	夕やけ	夕食	やりとおす	山出し	山うど	やど屋	ヤシ	役人	やぎ	問題	物がたり	持ち主	もうじゅう	めんば
107	45	25	117	18	72	50	111	64	106	126	7	27	34	122	47
リン	旅行地図	両手	両足	ラジオ	楽に	らくだ	弱 <small>つ</small> (て)	読みやすい	よこはら	夜汽車	用意	ゆるめ(たり)	ゆらゆら	ゆみ	指おりの
65	106	64	91	58	132	70	52	13	120	103	36	81	89	143	114
わらじばき	わらじ	わらい話	わざとらしく	わかれ目	ろ馬	ろく音放送	ろく音	ローラースケート	労働者	ろうそく	れんだい	れんげそう	練習し(て)	レコード	レール
49	48	8	72	115	76	65	63	70	76	133	111	24	67	66	116

暑 <small>あつ</small> い	茶 <small>ちや</small>	黄 <small>き</small>	開 <small>ひら</small> き	来 <small>く</small> る	芸 <small>げい</small>	説 <small>せつ</small>
(126)	(110)	(96)	(88)	(78)	(69)	(62)
皮 <small>かわ</small>	人夫 <small>ひとぶ</small>	細 <small>ほそ</small> い	底 <small>そこ</small>	坂 <small>さか</small>	独 <small>どく</small>	貝 <small>かい</small>
(132)	(111)	(100)	(89)	(78)	(70)	(64)
英 <small>えい</small>	特 <small>とく</small>	千 <small>せん</small>	苦 <small>くる</small> しく	軽 <small>かる</small> く	唱 <small>しやう</small>	合 <small>あ</small> わせる
(141)	(117)	(102)	(91)	(83)	(70)	(64)
語 <small>ご</small>	別 <small>べつ</small>	急 <small>きゆう</small>	午 <small>ご</small>	重 <small>おも</small> く	停 <small>てい</small>	油 <small>あぶら</small>
(141)	(117)	(104)	(92)	(83)	(74)	(64)
	員 <small>いん</small>	港 <small>みなと</small>	期 <small>き</small>	幸 <small>こう</small>	快 <small>かい</small>	練 <small>れん</small>
	(120)	(105)	(94)	(85)	(75)	(67)
	岩 <small>いわ</small>	旅 <small>りよ</small>	研 <small>けん</small>	福 <small>ふく</small>	劳 <small>ろう</small>	習 <small>しゅう</small>
	(121)	(106)	(94)	(85)	(76)	(67)
	陸 <small>りく</small>	湖 <small>こ</small>	究 <small>きゆう</small>	泳 <small>えい</small>	者 <small>しや</small>	秒 <small>びよう</small>
	(125)	(108)	(94)	(88)	(76)	(68)

編修委員

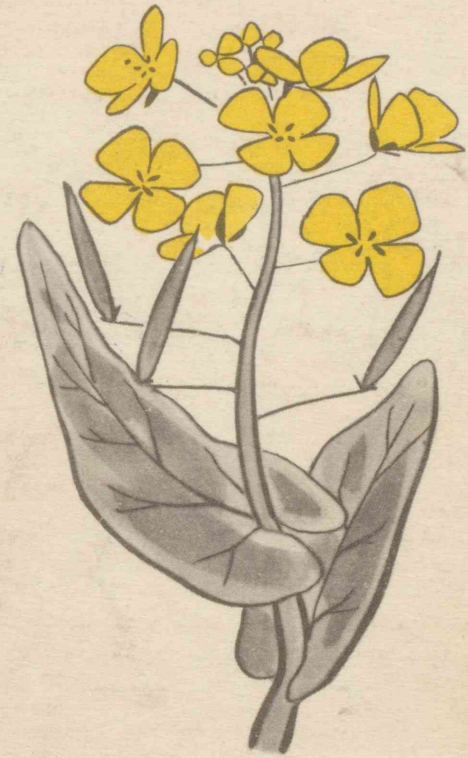
日本女子大学付属 豊明小学校主事 豊明小学校教諭 東京学芸大学竹早 付属小学校教諭	同	成蹊中学校教諭	日本女子大学付属 豊明小学校教諭	作家	伊勢田邦彦 谷口健雄 松井末雄
西原慶一	山下正雄	飛田多喜雄	小山玄夫	斎田喬	大沢昌助 土村正寿 箱崎正秋

さし絵・表紙

Approved by Ministry of Education (Date Sep. 28, 1950)

12 二葉	小国420
発行所 東京都北区稻付町一丁目二〇八番地 二葉株式会社	発行者 東京都北区稻付町一丁目二〇八番地 二葉株式会社 代表者 大野治輔
印刷者 東京都北区稻付町一丁目二〇八番地 二葉株式会社 代表者 大野治輔	著作者 西原慶一 代表者
定価 六十四円	昭和二十六年五月十日印刷 昭和二十六年五月十五日発行 (昭和二十五年八月十二日文部省検定済)

国語の本 七 (小学校第四学年前期用)



なまえ

広島大学図書

0130449918



二葉株式会社

麻
0
8